
導師オッショーの台本

高橋A全

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

導師オッショーの台本

【Nコード】

N2001Y

【作者名】

高橋A全

【あらすじ】

少年が迷いこんでしまった世界は、『台本』によって支配されていた。誰もが自分専用の『台本』を持っていて、その通りに行動することを定められており、『台本』の『設定』から逃れることは許されなかった。なぜか『台本』を所持していない少年は、状況が何も分からないまま、ふたりの女の子と出会う。『台本』を所持している女の子たちは、少年が『魔王』の部下で、自分たちはその下僕である、と一方的に説明すると、少年と三人での共同生活を始めてしまう。戸惑い、混乱する少年をよそに、『台本』通りに次々と

イベントが発生し、状況はどんどん変わっていく。そしてとうとう、『勇者』役の少年が、敵としてあらわれる。『魔王』の部下と『勇者』、ふたりの少年は生命をかけて対決することになるのだった。

プロローグ（前書き）

この作品は、立花潮美さんの同名の小説を、許可を得て微修正し、投稿しているものです。

初投稿で、テストを兼ねています。おかしい部分がありましたも
ご容赦ください。

プロローグ

荒野を歩く、三つの人影があった。

一人は小柄な男であり、もう一人は長身の女である。三つ目の人影は、外見こそ人間の女に似ているが、どうやら人間ではないようである。

男が口を開いた。

「見わたすかぎり、岩や石ころばかりだね。どこまで続いてるんだろう」

若い声である。むしろ少年と呼んだほうが、ふさわしいかもしれない。

「しばらく続くわ。だが、この先には緑豊かな大地が広がっているはずよ」

そう答えた女の声も若い。女は背が高いので少年より年上に見えるが、実際の年齢は、ほとんど変わらないようである。

そのふたりの腰には、剣があった。どこか重たそうにしている少年に対して、少女はそれを微塵も感じさせない足取りをたもつていた。

おそらく、少女のほうが剣の腕は立つ、と見てまちがいないのだろう。

「ねえ、本当にこの方向で合ってるのかなあ」

情けない声を出した少年を見て、少女は軽く眉をひそめると、三つ目の存在を見た。

「はい、間違いございません。この先に噂の魔法使いが住んでいるはずです、勇者さま」

どうやら、三つ目の存在は人語を解するようである。

「その呼びかた、やめて欲しいんだけどなあ。ぼく、勇者じゃないし」

少年は情けない声を出したが、少女はそれを無視して存在に話し

かけた。

「その魔法使いは、腕が立つのか？」

「噂ではそうでございます、お嬢さま。なんでも、あの八部衆に匹敵するとか」

「眉唾物ね」

少女は吐き捨てたが、存在は気を悪くした様子もない。少年が困った感じで訊いた。

「その魔法使いさん、名前はなんていうの？」

「『フリードリヒ・アレクサンデル・ライゼンブルグ』と聞きおよんでおります、勇者さま。なんでも『全てが死に絶える永久氷土の守護神』のふたつ名を持つとか」

「はっはっは。すごいなあ。名前だけで強そうだね」

少年はのんきに笑ったが、少女は顔も声も不機嫌になった。

「爵位も持たぬ輩が、ふたつ名などと、百年は早い。許せぬな」

「まあまあ、いいじゃない。とにかく、会うだけ会ってみようよ」

頭から湯気を出している少女をなだめると、少年は先頭に立って歩みを進めた。

第一章 この世界へようこそ

そして気がついたとき、少年は椅子に座っていたわけで。

——あれ？

小首をひねった少年の視界に入ってきたのは、見慣れた教室の風景。

目下、六時間目の授業の真っ最中で、教卓の前にいるのは担任の数学教師だ。

何が起こったのかよく理解できてない少年に、唐突に声がかけられた。

「おい、一戸。一戸為男」

ごく自然に、少年は返事をして立ち上がった。

「はい、何でしょうか先生」

教師が、ちょっと嫌な感じの笑みを浮かべながら訊く。

「問四の答えは？」

少年はあまり数学が得意ではなかったけれども、黒板を見て懸命に頭の中で計算して、なんとか答えを導き出した。

「……四百三十七です」

「なんだ、聞いていたのか。てっきり目を開けたまま寝ていたのか、と思ったよ」

教室のあちこちから笑い声が聞こえて、少年は赤面して椅子に座った。そして、

——ここはどこ？　ぼくはだれ？

と、かなり真剣に自問自答をした。

少年だって莫迦ではないから、ここはいつもの高校の教室で、自

分は『一戸為男』であることは、そりゃあ痛いくらいによく分かっているのだ。ただ、ほんのちよっぴり違和感が頭のどこかをふわふわ漂っていて、それが気になって仕方がない。

さっきまで、別の場所に居たような気がするし、ずっと、ここに居たような気がする。

さっきまで、違う名前だった気がするし、ずっと、この名前だった気がする。

——おかしいなあ。

と、少年はうんうん唸ってしばらく考え込んだ。のどに魚の小骨が刺さっているような、そんな嫌な感じが頭の奥深くに存在していて、なんともいえない気持ち悪さを生み出している。そんな少年を見て、隣の席の女子生徒が心配そうな声を出した。

「どうしたの？ 気分悪いの？」

囁くような小声で問われ、少年も同じような声で応えた。

「大丈夫。何でもないよ、『木村』さん」

そう、その通り。少年の隣にるのは、まごうかたなき『木村』さんだった。

——先生が言った通り、ぼくは寝てたのかな。

さしあたって、少年はそんな結論で落ち着くことにした。

やがて授業終了の鐘が鳴り、教室の中が騒がしくなった。

ぼんやりとした足取りで廊下に出た少年に、一人の男子生徒が声を掛けた。

「一戸、もう帰るのか？」

「ああ、うん。ぼくは帰宅部だからね」

「お前もいい加減に部活に入ればいいのに」

「いいよ。『加藤』みたいに運動神経よくないから」

「そうか、じゃあこれから部活だから。また明日な」

「さよなら」

会話はケチの付けようも無いほどに、よどみ無くかわされた。少

年の記憶が正しければ『加藤』はサッカー部だったはずである。

——やっぱりぼくは一戸為男だ、まちがい無い。

九十九パーセントの確信を得て大きくうなずくと、少年は下駄箱へと足を向けた。

「ぼくは『いちのへ ためお』だ」

少年は学校を出ると、まっすぐ駅に向う。

「ぼくは『いちのへ ためお』だ」

少年は自動改札に定期券を通して、電車に乗る。

「ぼくは『いちのへ ためお』だ」

少年は自宅の最寄り駅で降りて、再び改札を抜ける。

「ぼくは『いちのへ ためお』だよな……」

声に出して再確認。少年にとって、それは疑いの余地の無い確固たる現実、のはず。

学校を出てから自宅に至るまでの道筋には、全く不都合が無かった。ここまでは迷うことなく『一戸為男』でいられたのに、駅を降りたところで初めて問題が発生したのだ。

一戸為男は、自分の家の鍵を持っている。そして、財布にそれが入っていることも知っている。家の住所も知っているし、さらには家の外見も知っている。だが、

——親のことが思い出せない。

これは結構重大だぞ、と感じた為男はこめかみを軽くもんだ。為男だってまぎれもない人間であるから、両親がいるはずである。もしかしたら別の場所に住んでいる、とか、既に他界している、という可能性もあるけれども、それならそれで、為男自身がその事実に関する知識を持っていないといけないはず、なのだ。

ところが、その情報が、為男のなかからすっぽりと抜け落ちてしまっている。

学校で感じていたかすかな違和感が、為男の中でむくむくと首をもたげてきた。

——なぜ、両親に関する情報だけ持っていないんだろう？

悩みつつ迷いつつも、為男はきれいに舗装された道を歩き、とある一軒家までたどりついた。門の前で立ち止まると、家全体を注意深くながめる。

——まちがいないく、一戸為男が住んでいる家だ。

為男はしつこいほどに確認した。

この規模の一軒家であれば一人暮らしは有り得ない、という知識——この場合は常識といったほうがいいかもしれない——を持っているがゆえに、為男は慎重に行動した。

仮にも同居人がいれば、失礼の無いように行動しなくてはいいけないからだ。

為男は音を立てないようにそつと門を開けると、震える手で財布から鍵を取り出した。それを慎重に鍵穴に差しこみ、時計回りに回転させる。ちいさな金属音とともに開錠されたのを確認すると、為男はまるで泥棒のようにして屋内に体をすべりこませた。

——生活感が漂ってるなあ。

それが第一印象。ただ、自分が住んでいる家なのだから、生活感があるのは当然のこと。

たたきの上で低く身をかめたまま、為男は忙しく眼球を動かした。

目についたのは、靴箱の上にある花瓶と花。それは造花ではないし、しおれてもいない。とすると、この生花は誰かが準備した、ということになる。

自分は花など買うだろうか、と考え、為男は首を左右に振った。普通に考えるなら準備したのは女だろうな、と結論づける。

——おそらく、ぼくは一人暮らしではないだろうけど……。

一番ありがちなのは母親が用意した、というものだけれど、それならそれで母親の知識を為男は持っているはずである。不思議な違

和感が飽和して、視線を落として考えこんだ為男の視界に、ある物が飛びこんできた。

靴。

それも二足あり、しかも見覚えがある。

——学校指定の革靴。しかも女物だ。

そこまで認識した為男の額から、滝のように汗があふれはじめた。

「一戸為男には、姉や妹がいただろうか？」

いいえ、居ません。

「一戸為男には、近所に住んでいる親戚の女の子がいたのだろうか？」

いいえ、居ません。

「一戸為男には、家に呼べるような彼女、もしくは友達である女子生徒がいただろうか？」

いいえ、居ません。

いいえ、いいえ、いいえ。そんな情報は持っていません。

結論。

警告！ 有り得ない状況です！ ここは一戸為男の家ではない可能性があります！

為男の耳に、ブブブー、という嫌な効果音が鳴り響く。直後におどろおどろしい極彩色で脳内に描かれたのは、『不法侵入』の四文字。

家に入る前に呼び鈴を鳴らしておけばよかったのかもしれないが、今となってはアフターフェスティバル、つまり後の祭り。仮にも、同じ学校に通う女子生徒の家に勝手に鍵を開けて音も無く入った、となれば、それはもう一大事、としか言いようが無い。

——見つかる前に、逃げないといけないじゃないか！

と、為男は世界を救うべく立ち上がった勇者のように強く決意したが、

残念なことに遅かった。

何かを感じて顔を上げた為男の視界に飛びこんできたのは、一人の髪の長い女の子。

ブラウスに付いているリボンの色から一年生であるとわかり、為男の冷汗の量は急激に増大した。同学年の知っている生徒ならまだ言いわけのしようもあるけれど、下級生となるとどうにもならないからだ。しかも、相手は見るからに結構性格のキツそうなキレイ系の女の子で、生半可な言いわけなど微塵も通用しそうに無い。

為男の動揺をよそに、その下級生の女の子は黙ってこちらに近づいてきた。

更にまずいことにもう一人、少し幼さの残るかわいい感じの別の女の子が現われ、短い髪を揺らしながら小走りにこちらに向かってくる。

逃げ出そうとして足の動かない為男の前にやってきた二人は、為男が何か言う前に、

その場にひざまずいた。

「お帰りなさいませ、『ご主人さま』」

「『ご主人』、お帰りなさいです」

それぞれ声音のちがう少女たちの台詞を聞きながら、為男はその場に立っているのが精一杯だった。

為男が、まるでさらし粉で漂白されたように脳内が真っ白になりつつも、

「ええと、うん、あれだ。……ただいま！」

と、ほがらかに言ったのは、さしあたってその場を取り繕おう、というせこい考えから。ところがどっこい、髪の短い方の女の子が、

「にへへ」

と、笑って為男の学生鞆を取り上げるようにして持ち、もう一人の髪の長い女の子が、

「どうぞ」

と、うやうやしくスリッパを出してくれたので、為男は仕方なしにそれを履いてずかずかと家の中に上がりこんでしまった。

まるで勝手知ったるいつもの我が家、のような感じで大きな部屋までたどりついてしまった為男は、

——ああ、ここは居間かな、それともダイニングと呼んだほうがいいのか。

などと、どうでもよいことを考えて誤魔化していたが、それでも女の子に示されるままに角型の大きなテーブルに座りこみ、二人の女の子が相對するように座りこんでしまった後では、黙っているわけにもいかなかった。

為男は諦めて現実と向きあうと、少し考えてから訊いた。

「……それで？」

二人の女の子は、顔をちょっと見あわせてから応じた。

「『それで？』というのは？」

「二人は、ぼくのことを知ってるの？」

「そりゃ当然でしょ。『ご主人さま』だから」

と、なに言ってるのこのひと？　みたいな感じで髪の長い女の子に言い返されたので、為男はかなりバツの悪そうな顔をしながら、

「いや、でもぼくはふたりのこと知らないんだけど」

と、真剣に言った後で、小さくため息をついた。二人の女の子は再び顔を見あわせて、

「ねえ落子、こういう『設定』だったっけ？」

「ええと、わたしはよく覚えてませんですけど」

「どうすんの？」

「と、とりあえず……自己紹介でもしておきますですか？」

などと、為男には意味不明な会話をしている。

それでもひそひそ話のあげくにふたりの意見が決まったらしくて、髪の長い方の女の子が、

「あたしは色部冷子、見ての通り高校一年生よ、ご主人さま」

と、あでやかに言いつつ、とても一年生とは思えない魅力的な足

を組みかえ、おとな顔負けの大きな胸をそらしてみせると、もう一人の髪の短い女の子は大きく挙手してから、

「わたしは逆井落子です！ 同じく一年生です、ご主人！」

と、まるで選手宣誓をする運動会の小学生みたいに、元氣よく言っ
てのけた。

「……はあ」

と、為男がため息混じりにそうつぶやいたのも当然のこと。

これって自己紹介になってないんじゃないのかな、とか、いやいや、名前が分かっただけでもマシなのかな、とか内心でぼやき、手紙で『放課後、校舎裏で待ってます』と呼び出されたのに結局誰も来なかった、みたいな切ない気持ちになりながらも、為男は覚悟を決めて大事なことを訊いた。

「で、二人はぼくの何なの？」

それに対する答えは二人同時で、一片の迷いも感じられない口調。

「『下僕』です」

かくしてこの家で都合三度目となるため息をついた時、為男は決意した。

もうこうなった以上、全部正直に言うしかない、と。

「ぶっちゃけて言ってしまうと、ぼくは状況が全然分からないんだ」

と、為男はまるで全面降伏した全滅寸前の部隊の指揮官のような口調で言うと、

「ぼくは何なんだろう」

と、自分でもかなり曖昧だなあ、と思われる質問をした。

これで『だからご主人さまです』などと返すのだけは許して欲しいなあ、などと為男が祈ったのも僅か数瞬のことで、二人は再び同時に答えた。

「『魔王』の最強の部下で、『四天王』の筆頭です」

しばし、沈黙。

虚を突かれた為男はあんぐりと口をあけたまま、冷子は形のよい眉を軽くひそめたまま、落子にはへへと笑ったまま、てくてくと時間が流れていった後で、

「まおう、っていうのは、『魔』の『王』なの?」と、為男は訊いた。

色部冷子がえらそうにうなづく。「そうよ」

「じゃ、ぼくは悪者の部下なの?」と、為男は顔をしかめた。

逆井落子がこくこくとうなづく。「そうです」

「つまり、ぼくも悪い人?」と、為男の顔がさらにけわしくなる。

返ってきたのは、二人並んでの春風のように爽やかな笑み。「はい、ものすごく!」

そして再び、沈黙。

沈黙を破るべく口火を切ったのは冷子で、

「ねえ、やっぱりおかしいよ。『設定』とちがうじゃん」と、断定すると時計を見て「もうこの時間なら日は落ちてるわね」と、独語しつつ、為男に向かって「その鏡を御覧になってください」と、名前の通り冷たく言い放った。

思考が停止したままの為男は、言われるがまま、自分の左にある大きな鏡を見た。

そこに映ったのは異形の存在。

牙。爪。蝙蝠のような翼。盛り上がった筋肉。

「夜は鏡の中に真の姿が現われるの。一応、人らしい形はしてますでしょ?」

と、色部冷子がくふふつ、と笑った。

逆井落子はちよつと困ったような、嬉しいような、不思議な顔で

為男を見ていた。

第二章 みんなのやくそく――（ 1 ）

そして、一戸為男は驚いた。

何が驚いたって、鏡に映った自分が化け物の姿をしているのに『ああ、そういうものなのか』と、なんとなく納得して思わずうなずきかけてしまったからだ。それでも、

――もしかしたら鏡に細工がしてあるんじゃないか？

と、疑いつつ、腕を上げたり下げたり首を左右に振ってみたり、鏡の中の化け物が左右が逆なだけで、自分と全く同じ行動を取ることに流石にちよつと腹を立てはじめたとき、色部冷子がとなりでにへへ、と笑っている逆井落子を誘って、為男の後ろに回りこんだ。

それはつまり為男ともども鏡に映ろう、という作戦で、鏡の中の化け物の数が三匹に増えた時、為男は無条件降伏を受諾した。

「……どうやら、本当にそうらしいね」

と、うなだれた為男を見て、冷子は鏡に映っている黒い羽ごと背筋をそらすと、

「ご主人さま、『台本』読んでいらっしやらないでしょ？」

と、あきれた口調で言った。それに対して為男は、

「『台本』って、何なの？」

と、訊くは一時の恥、訊かぬは一生の恥、とばかりに、悟りを開いた高僧のような口調で言い返したが、そこで返ってきた反応は為男の想定の外にあった。

「嘘！ 『台本』のことすら御存じ無いの？」

「ああ、わたしよりもさらに上の人がいるなんて……」

鏡に映る尖った尻尾を嬉しそうに左右に振りつつ、まさに春爛漫、といった感じの落子のハートを、斜め左後ろから体ごとふっ飛ばしながら、寒風を身にまとう冷子が言った。

「あんたは台本読んでない、っていうか読んでも忘れてるだけですよ」

「ああっ！ 冷ちゃんひどいい！」

うるうる、と目を潤ませた落子を見無視して、ぶるぶる、と胸を振るわせた冷子は、

「悪いんだけど、はっきりさせたいの。ご主人さま、冗談をおっしゃってるの？ それとも、本当のことをお話されているのかしら？」と、生活指導の女教師のような口調で問い詰めてきた。

——ああ、キレイな子に敬語で怒られるのも、そんなに悪くないなあ。

などと、為男は少々の外れなことを考えつつ、
「知らない。知らないんだ。だから、分かるように話して欲しいなあ」

と、懇願するような目つきで申し開きをした。

二人の女の子は驚いたような戸惑ったような顔を見合わせた後で、
「あのですね、あたしたちは下僕なんですけど」と、冷子が細い眉をひそめた。

「らしいね」

「ご主人の命令には絶対に従いますです」と、落子が丸い目で見つめた。

「なるほど」

「あたしたちにお願いするのとか、やめていただけませんかでしょうか？」と、再び冷子。

「はあ？」

ここで色部冷子は敬語を使うことを諦めたらしい。

「だから下僕なのよ。わかる？ お願いしないで、命令して欲しいんだけど。こっちがやりづらいのよね」

「そう、なんだ」

為男はうんうんうなって腕組みをすると、しばし黙考した。

——どうやらこの世界には『台本』なるものがあって、ものすごく大切なものらしい。だけど、それについてぼくは知識を持ってないので、どうしたらいいんだろう？

なんとかして二人の女の子から聞き出す術はないのだろうか？

そこで何かが流星の如くきらめいて、為男は二人の目を交互に見ながら訊いた。

「ぼくの命令は、絶対？」

「はい、絶対です」

と、二人が同時に答えたのを聞くと、為雄は座りなおしてから命令した。

「なら、『台本』を見せてくれ……いや、見せろ！」

こんな感じでいいのかな、と手探り状態の為男に、冷子の厳しいカウンターが一閃。

「それは、できないわね」

「は？ 何で？ いま『絶対』って言ったじゃないか」

僅か三秒で前言を撤回され、温和な為男も少々非難がましい口調になったが、

「自分の『台本』を他人に見せるのは、『禁忌（タブー）』だから」と、冷子に返されてしまった。

——これはまた随分と、小難しい単語が出てきたもんだなあ。

と、為男は呆然としつつも、これではならじ、と再度命令した。

「ええと……じゃあ、あれだ。『台本』に関する『禁忌』について、説明……しろ？」

冷子は即答を避けると、隣のショートカットの同級生を見つめた。

「これは、セーフよね？」

「むうー。……まあ、『禁忌』はみんな知ってるはずですからあー」

為男は期待と不安の入り混じった目でふたりの女の子を見つめていたが、無言の相談の後、落子の方が口を開いた。

「『台本』は一人に一冊与えられていますですが、それぞれの『台本』はその人専用の特製で、一冊一冊内容がちがうです。なので、他人が読むといわゆるネタバレになってしまうので、『絶対に他人が見てはいけません』という厳しい決まりがありますですね。その『禁忌』を破ると、それはもうどかーんと、ビックリドンキリ

できやいーんな、凄くドでかい大不幸が訪れるです、ってことにな
ってますです」

「……はあ」

長い説明の割にはよく分らなかったが、為男は落子の言葉の内
容よりも、その真剣な表情を見て自分を納得させることにした。そ
んな主人の反応を見て、えっへん、と満足そうにしている落子に、
為男は続きをうながした。

「で、他には？」

「ふえ？ 他には何もないですよ」

のほほんと答えてみせた落子を見て、為男はあきれながらも、
「いや、無いわけ無いよ。捨てるなとか汚すなとかはあるだろうし、
あとは『台本』で決められたルールを破るな、みたいなものもあるん
じゃないの？」と、食い下がって見たが、

「そんなこと、できっこないから大丈夫ですよ」と、笑顔で返さ
れてしまった。

それはおかしいよ、と全身で表現している為男を見て、冷子が強
く厳しい声を出した。

「大事なアイテムは、捨てたり壊したりできないでしょ？ それに
ルールは破れるようには造られていないのよ。だから、禁じる必要
すらないの？ わかる？」

冷子の断定的な口調を聞いた為男は反論をあきらめた。実際に『
台本』を所持して、『台本』の知識も持っている二人がこう言っ
ている以上、本当のことと思えるから、ここで為男が抗議してもどう
にもならないのだろう。

野球の審判に向かって、『どうしてストライク三つでアウトなん
だ！ ストライク四つでもいいじゃないか！』と、抗議したってど
うにかなるものではない。つまりはそういうことだ。

そこで、為男は無駄な抵抗をやめて、具体的な話をすることにし
た。

「じゃあ、『台本』そのもの、について訊きたいんだけど」

主人の命令を受けた冷子は、ダブルエスプレッソを飲み干したような苦い声で応えた。

「初めに言っておくけど、答えられないことがほとんどになるわよ？ 『台本』を他人が読むな、っていう『禁忌』があるんだから、自分の『台本』を他人に読み聞かせるのもだめだ、っていうのくらいは分かるわよね？」

「ちょっとくらい、ダメなのかなあ」

「あのね、ご主人さまのために言っているのよ？ ここであたしがぺらぺら『台本』読み聞かせたらどうなると思うの？ ご主人さまがあたしの『台本』を読んだ、ってみなされてしまうのよ？ そしたらドでかい大不幸が訪れるのはご主人さまに対してなんだからね。それに、自分の未来の行動を他人に知られるなんて、恥ずかしいじゃない！」

全くもって、ごもつともな指摘だ。思わず納得しまった為男は、とにかく当たりさわりの無いことを訊いてみることにした。

「まあ『台本』っていうからには、台詞とかが書いてあるわけだね？ もしかして、今、二人が話している台詞も『台本』に書いてあるの？」

「いま、こうして話していることは『台本』に書いてないわね。でも、キャラの『設定』に『冷子は下僕として主人の命令に絶対従うこと』と、書かれているの」

「それで、ぼくの質問に答えてくれている、と」

「そういうことね」

満足そうに冷子が大きく頷いたが、為男にしてみれば訊きたいことは山ほどある。

「で、誰が書いたの？ この台本」

「知らないわ」

「二人の持つてる台本は、同じ人が書いたの？」

「おそらくは、ね。共同執筆、という可能性もあるから断言はできないけど」

「で、誰の為に書かれてるの？ この台本」

冷淡に質問に答えていた冷子が、初めて返答に窮した。

「……どういう、意味なのかしら？」

「つまり、ぼくたちはその『台本』通りに、まあ、ある意味、劇を演じているわけだね」

思わず、と言った感じで、冷子は右手のひらを自らの頬にぴたりと当てた。

「そ、そういう見方もできると思うけど……」

「誰が見てるの？ 誰に見せてるの？ 何の為に？」

と、為男は矢継ぎ早に質問の矢を繰り出したが、

「それは、ちょっと……分からないわ」

と、冷子が初めて困惑の色を見せたので、為男も、

——どうやら本当に知らないみたいだなあ。

との、結論を得た。

戸惑いを隠せない冷子に、為男はたたみかけるように連続攻撃。

「じゃあ、僕が『台本』を持ってないのはなぜ？」

「それは、何かのミスとか手違いとか……」

「他にも持っていない人、知ってる？」

ここで冷子は大きな胸の下で腕を組んで少し考えた後で、

「『雑魚』は持ってないみたいね」と、答えた。

「『雑魚』？」と、眉を軽くひそめた為男に、

「『雑魚キャラ』の人間のことよ。いてもいなくてもどうでもいい人たち。あ、勿論、犬とか猫とかも台本は持ってないわね」と、冷子が乾いた声で説明する。

今度は為男の方が困惑した。右手で顔をぬぐったのは、意識しての動作ではない。『雑魚』という言葉いかたよりも、冷子が『雑魚キャラ』という、人間と犬猫とを、まるで同じレベルのものとして扱うような、あっさりとした口調で言ったことが気にさわったのだ。

「あの、ご主人。ご気分でも悪いですか？」

空気をかき回すようにして落子に手を振ってみせると、為男は話

題を変えた。

第二章 みんなのやくそく ― (2)

「ぼくが台本を持っていない、ということに関して、君らふたりはどう思ってるの？」

為男は逆井落子の丸い目をのぞきこむようにして訊いたが、

「あ、できれば名前で呼んで欲しいです」

と、落子はまるで子犬のような瞳をきらきらさせてお願いしてきた。

為男は、つい十五分ほど前の記憶を脳内で反芻。

「ええと、色部さんに逆井さん、でいいんだっけ？」

「きゃいーん！ 下の名前で呼んで欲しいです」

子犬ちゃんのご不満の様子である。仕方無く、為男は慎重にそれぞれの名前を呼んだ。

「……れいこさんに、おちこさん？」

「『さん』とか、要らないから」

冷子は、名前以上に冷たい視線で言った。

「でも、それはちよつとなあ」

「あたしたち、下僕っていう『設定』なのよ？ 『さん』とか付けられると、やりにくくって仕方無いのよね。無い方がいいんだけど」と、眼光するどい冷子に、

――『設定』の問題じゃなくて、ポリシーの問題だ。

と、為男は渋面を浮かべた。

初対面の女の子、それが幾ら後輩だといっても、下の名前で呼ぶ、っていうのはちよつと恥ずかしい。ましてや呼び捨て、っていうのは、なんか妙に馴れ馴れしい限りで為男は困り果てた。

それでも下僕二人に真剣な目で懇願され、為男は仕方なしに承諾した。でもまあ、慣れないことには変わりなく、ものの見事に言い終える前に嚙んでしまった。

「れいこ、に、どじこ？」

「それでいいわ」

と、冷子はにっこり笑って即答。二秒ほど遅れて落子は挙手して抗議の声。

「すとーっぷ！　すとーっぷ！　よくないですよよくないです」

冷子は同僚の異議申し立てを意に介した様子もなく、さらりと言つてのけた。

「でも、やっぱりおかしいわね」

「何が？」

「ご主人さまが『台本』知らない、っていうことよ」

「なぜ？」

「知らないんなら、自分の名前も知らないはずなんだけど」

――あ。言われてみれば。

「ここって、結構特殊な『設定』なのよね。地球という惑星の、日本という国の、東京という首都の近郊、そしてそこにある高等学校の普通科だし」

冷子は下僕とは思えない、容赦の無い視線と口調で主人を追い詰めた。めつつあった。

「それに、この家までたどりつけないと思うわ。定期券を持ってるから、降りるべき駅は分かってても、家の住所は知らないはずでしょ？」

「住所が学生証に書いてある可能性は？」

色部冷子は、思わず為男が目を見張ったほどの、高校一年生とは思えない妖艶な笑みを浮かべた。

「ご主人さま、学生証なんて持ってるんだ」

掌の上で転がされるような感を覚えつつ、為男は財布と定期入れを探った。

「……無い、みたいだね」

「でしょうね。学生証を使うシーンが無いから、そんな小道具は用意されていないのよ」

「小道具、ねえ」

——じゃあ、この目の前の机は大道具なのか？
と、為男は思った。それにこの家は？ 街は？ 駅は？ 電車は？
そして学校は？

為男はえいえい、と気合を入れた。ちよつとでも気を抜くと、注意がすぐに明後日の方向に飛んでいってしまう。まずは『台本』のことをはっきりさせなくてはいけない。

「他人の『台本』を読むのは『禁忌』なんだよね？」

主人の質問を受けて、当然です、とばかりに同時にうなずく冷子と落子。

「外見を見るのも駄目なの？」

それはどうでしょうね、と今度は同時に小首をかしげてみせるふたりの下僕。

「台本の外面だけでいいから、見せて欲しいんだけど？」

いい加減にして、と冷子だけが顔をしかめた。

「自分の立場をわきまえて欲しいんだけど。あたしたちに頼むのやめてよね」

「……『台本』の外見だけ見せるんだ、冷子。命令だぞ？」

「つまり、中身を読まないけど存在を確かめたい、という意味にとればよろしいでしょうか、ご主人さま」

「そうだよ。もしかして外見を見れば、ぼくも『台本』について何かを思い出すかもしれないだろ？」

「それなら、『禁忌』に引っ掛からないかな……」

小声でつぶやきつつ、冷子は自分の鞆に手を伸ばした。

「はい、これ。触っちゃ駄目よ、ご主人さま」

冷子が為男の目の前に差し出してみせたもの。

予想外にも、その大きさは文庫本程度しかない。そして——

「——白い本だね。表紙も裏表紙も背表紙も真っ白だ。せめて、題名か持ち主の名前くらいは書いてあるか、と思ったけど」

実物を見ても、為男は何も思い出すことができなかった。それでも念の為に訊く。

「ドジ子のは？」

「……あの、ご主人。本当にその名前ですか？」

「まずい？」

「ご主人さまに名前を付けていただくなんて、下僕として誉れなにとだ、と思うわ」

冷子の意地悪な視線を受けて、落子は目をうるうるさせた。

「ううう……それでいいです」

「見せてくれ、ドジ子」

と、わざわざ為男が名前を呼んだのは、そう呼ばれたときの、逆井落子の困ったような、怒ったような、そしてどこかちよっぴり嬉しそうな顔が少々気に入ってしまったからだ。

落子は為男の期待通りの表情を浮かべつつ、制服のポケットの中を探ると差し出した。

「はい、これです。ご主人」

ドジ子の台本も、同じように白い本。大きさも文庫本程度。

だが、ただ一箇所だけ、冷子のものと異なる点があった。

見間違えような無い、それは明らかな違い。

この時、為男もその相違点に気付いていたのだが、むしろその小ささの方が気になったので、軽やかに流してしまった。

「この程度の小ささで、『設定』やら『台詞』やら、全部書いてあるの？」

主人のご下問に、下僕の二人が大きくうなずいてみせる。

「とすると、結構小さな字で、びっしりと？」

「そこはご想像にお任せするわね」

——それ以上は言いたくない、というわけか。

とりあえず、為男はあきらめとともに納得した。

「ぼくが思い出せることは、何もないなあ」

「あら、そう。困ったわね」

冷子はそう言って主人たる為男を見つめたが、困っているのは為男のほうである。

「仕方がないわね。『台本』無しでやっていく、しかないんじゃないかな
いかしら」

「でも、ぼく自身がどう振舞えばいいのか、も分からないのはなあ」
「それはあたしたちに訊かれても困るわ。あたしの台本には、基本的にはあたしのことしか書かれていないから」

為男は腕を組むと、椅子ごと後ろに仰け反ってうんうんうなった。
しばし考慮の後、

「せめて、ふたりはどういうキャラなのか教えてもらえないか？」
と、提案。

「それって、自分の台本を読み聞かせるのと同じことじゃないのよ」
と、拒否。

「じゃ、こうしよう。『二人が下僕として自分の立場をわきまえて
いるかどうか』を確かめたい。二人とも、確認の為に自分の立場を
説明してみせろ。これならどう？」と、妥協案。

冷子の口元が、かすかに緩んだ。

「へえ、意外と頭の回転は悪くないんだ」

「命令だぞ。冷子からだ」

意地になっている為男を見た色部冷子は、くふふつ、と笑うと、
「あたしは一戸為男という仮の名を持つご主人さま、すなわち魔王
四天王の筆頭、その下僕の色部冷子です。得意なのは攻撃魔法」と、
大きな胸を突き出し気味に言った。

「へえ、魔法とか使えるんだ」

と、為男が楽しそうに笑っていられたのもここまでだった。

「ええ。そしてあたしはご主人さまの愛人で、毎晩お情けをちょう
だいしています」

「……は？」

引きつる笑顔で為男は裏返った声を出した。

「『お情け』っていうのは、その……つまり……」

「それがあたしの努めですわ、ご・主・人・さ・ま」

と、艶っぽくウインクした冷子を見て、一戸為男は両手でTの形

を作って大声を出した。

「ストップ！ タンマ、ちょっとタンマ。これは、これだけは確認しておきたい。これは、その、大人向けのお芝居なのか？」

「つまり？」

「その、アダルトな、いわゆる十八歳未満禁止の話なの？」

「そんなの、聞いてないわよ」

「で、でも、それらしいこと言ったじゃないか」

「『お情け』の話？」

「そう。そうそう、それ！」

「あのね、この世界の舞台は二十一世紀初頭の日本なの。この時代の高校生だったら、それくらいバンバンしてるのが当たり前でしょ？」

その返答を聞いた為男は、まるで神父に助けを求める子羊のような目でもうひとりの下僕を見つめたが、落子は顔を赤らめてうつむきだけだった。そんな相方を冷子は容赦なくうながす。

「次、ドジ子の番よ」

為男に見つめられた逆井落子はモジモジしながら、

「あのう……わたしは一戸為男という仮の名を持つご主人、すなわち魔王四天王の筆頭の下僕、逆井落子です。得意なのは防御魔法です」と、小さな胸を抱え気味に言った。

為男は不安そうに作り笑いを浮かべていたが、落子はそれ以上何も言わない。しんぼう堪らん、そんな感じで為男は訊いた。

「で、ドジ子も、そ、そ、その、そうなの？」

落子は驚くほどの速さで手を小刻みに左右に振ってみせた。

「いえ、わたしはまだ、ご主人の『リュウアイ』をいただいております、はい」

それを聞いた冷子が、いよいよもって冷たく言い放つ。

「ちよっと、ウかんむり付いてるんじゃないの？ それは『チヨウアイ』って読むのよ」

そして、一同しばし沈黙。

——ああ、台本には『寵愛』って書いてあったのか。

と、事態を察知した為男は大きく頷くと、

「やっぱり、ドジ子でいいのかな」と、確認した。

「異議は無いわ」と、色部冷子は頷き、

「しくしく」と、逆井落子は泣いている。

悲嘆にくれる同僚から主人に視線を移すと、冷子がけだるそうに言った。

「で、するんでしょう？」

「な、何を？」

「そういうこと、女のあたしから言わせないでよ」

そう口を尖らせると、冷子は綺麗なウェーブのかかった茶色い髪をかき上げた。短めのブラウスの裾から見える素肌が、真珠のように白く輝いて為男の目に焼きつく。

「寝室は二階にあるから」と、冷子は席を蹴って立ち上がると「最初くらいムードを大切にしていね」と、呟くと振り返り「早くこっちに来てよ」と、不満そうな表情を浮かべて主人を見た。防戦一方の為男もいよいよ我慢できなくて、

「ちょっと待ってくれ！ 頼むから、『当たり前』みたいな言いから止めてくれよ！ ぼくはこの家に入ってから知ったことばかりですごく混乱してるんだ！」

と、大声で怒鳴った。冷子を叱るため、というよりも、自分自身の戸惑いのために。

その結果、一戸為男の当惑は更に増強されてしまった。

「も……申し訳ありませんでした、ご主人さま」

と、震える声で色部冷子はその場にひざまずいたのだ。しかも震えているのは声だけではない。ふと気付くと、逆井落子も椅子から転がり落ちるようにしてその場に土下座している。こちらも体を震えさせ、わずかに見える顔は冷子同様に真っ青だった。

第二章 みんなのやくそく ― (3)

「お、おい。ふたりともどうしたんだよ」

冷子は答えない。

恐る恐る、といった体で落子が神妙に申し立てた。

「あ、あのですね、ご主人は怒ると体から『闘気』が出るです、はい……」

「『闘気』？ オーラみたいなものか？」

「は、はい。です。ご主人はわたしたちより圧倒的に『レベル』が高くて強いので、ご主人の怒りの『闘気』を浴びると、その、下僕のわたしたちは……」

落子の声が掠れ始めたので、慌てて為男は深呼吸を繰り返した。

「違うんだ、怒ってない、怒ってないぞお、うんうん。……とりあえず、冷子、立てよ」

さっきまでの強気はどこへやら、ゆらゆらと立ち上がった色部冷子は幽鬼のようである。知らなかったこととはいえ、為男はいささかならず罪悪感を覚えた。

「何というか、あれだ。冷子、ちょっと自分の部屋行って、休んでこい」

「でも……」

と、紫色の唇が痙攣するように動くのをみて、為男は強く、優しく命じた。

「命令だから、休んでこい、冷子」

小さくうなずいた冷子がふらふらと居間を出て行くのを見届けると、為男は振り返った。

「ドジ子、お前も休むか？」

「あ、わたしの方は大丈夫ですけどです」と、落子は上目遣いで為男の顔をうかがっている。

「そうか。大丈夫なら椅子に座ってくれ。もう少し訊きたいことが

あるんだ」

為男が笑ったのを見て、落子はぴよこんと飛び上がるようにして立つと、スカートがしわにならないように注意深くいそいそと椅子に座りこんで、にへへ、と笑った。

「訊きたいのは『設定』のことだけど……あ、そうだ、その前に。何も考えずに言っちゃったけど、二人とも自分の部屋はあるんですよ？」

「ありますです。一人に一部屋を使わせていただいてますです」

と、どこか申しわけなさそうに言った落子を見て、為男は笑顔で応えた。

「大きな家だから、自由に使えばいいよ……じゃなくて、使うことを許可する」

「はいです！ キャツホウ！」

にぱぱ、と笑った落子を見て、色々な意味で安心した為男は咳ばらいをひとつ。

「その、さっきの話の続きになるけど」と、ここで為男は自分の口調が怖くならないように注意しつつ訊いた。「必ず、『設定』の通りになるのか？」

「今、『台本』に無い台詞をお話しているように、そこそこ自由が利きますです」

「じゃあ、自由が利かない場合もあるの？」

「ありますです。それは、強制イベントです」

「強制イベントお？」

「その、ストーリーの根幹にかかわる大事なイベントです。それについては、自由はほぼ利きません」

——ま、『台本』通りに進めるためにはそういうものも必要か。

為男は軽く納得しかけたが、慌てて頭を振った。

簡単に『強制』だというのが、それは自分の言動や行動の一切合切を支配される、ということではないのだろうか。それはちよつと怖すぎる。為男は落子の目を見て、

「強制と言うのは、どの程度の強制なの？」と、真剣な声を出したが、

「基本的には、体が勝手に動きますです」と、あっけらかんとした答えが返された。

「体が勝手に、って……じゃあ、台詞も？」

「はいですす」

為男は無意識の内に険しいものを顔に出してしまい、顔色をうかがっていた落子が子犬のように首をすくめた。為男はそれに気付かないで、

「強制ではないイベントもあるの？」

と、探るような声を出した。落子は三回続けて瞬きをした後で、縮めていた首を伸ばしてから、ちょこんと傾げると応じた。

「ふえ？ おっしゃっている意味がよく分かりませんが、まあ、何というか……強制じゃないイベントは、全部自由なイベントに当たると思いますす」

「自由……ね」と、呟いた為男は乾いた唇を舐めつつ続けた。「じゃあ、その『自由』っていうのは、ぼくはどれくらい利くもんなの？」

「いま、ご主人が自由に振舞えている程度に、ですす」

それはひどく曖昧な言いかたであっただろうけれども、為男はなんとなく理解できた。

「なるほど。じゃあたとえば、この家の中ではある程度自由が利くのかな？」

「はいですす。ここでは起こらな……な、な、な、夏の海はあらら〜♪」

この時、驚くほどの確に為男は落子の言いたいことを察知した。

「つまり、家の中で起こる強制イベントは無い、と」

「りりり〜♪ るるる〜♪」

一生懸命に誤魔化しているのを見ると、『家の中で強制イベントは起こらない』というのは、台本に書いてあることなので口にする

のは『禁忌』らしい。

「で、冷子のことだけど」

「れれれ〜♪ 冷ちゃんが〜 どうかしました〜 ですか〜 ろろろ〜♪」

「もう歌わなくて、いいから」為男は手を振って落子の即興歌を止めさせると、迷った挙句に正面切って訊いた。「その、設定の通りに、あ……愛人関係にならないと駄目なのか？」

落子はもともと丸い目を、さらに丸くしてみせた。

「ご主人、冷ちゃんのこと嫌いですか？ 冷ちゃん、バインバインです。ボツ・キュツ・ボーン、です。ブルンブルンです」

「それはそうだけどさあ」

と、半笑いで答えてしまった為男は、脳内にむくむくと湧き上がってきた冷子のボディラインを必死に追いはらいつつ言った。

「でも、会ったばかりじゃないか。それにそういう目的だけで、その、そういう関係になるのは、あれだと思う」

直後に為男が顔をしかめたのは、自分でも何を言っているのかわからない発言をしてしまった、という自覚があったせいだったけれども、落子の方は妙に納得したらしい。

「ご主人、意外と純情です。ビックリです」

にへへ、と落子が笑ったので、為男もそれに応えて、にへへと笑った。

ふたりで笑うと、何か妙に落ち着いてしまった。

——まいったな、訊きたいことは山ほどあるんだけどな。

とにかく、気になることから訊いておこう、と為男は決めた。

「とりあえず。なんで、ぼくのこと『ご主人』って呼ぶの？」と、素直に訊くと、

「ご主人だからです」と、会った直後を思い出させるような答えを落子は返してきた。

為男としてはそれでは納得いかない部分が多々あったので、しつこく訊いた。

「それってほらさ、普通は知り合いの奥さんの旦那さんのことをそう呼ぶわけでしょ? 『ねえねえ、お宅のご主人、〇〇で見かけたわよ』みたいな?」

「ですすね」

「なら、冷子みたいに『ご主人さま』でいいじゃないか」

「かぶるから、らしいです」

「……は?」

「冷ちゃんと呼びかたが同じだと、どっちが喋ってるか分からないから、主人に対する呼びかたをふたりで別にする、ってです」

「ぼくは十二分に区別付いてるけど、それは誰に対してなの?」

「さあ、誰でしょー、です」

しばし、むうー、と落子はうなって考え込んでいたが、急にぴよこん、と立ち上がった。

「あ、わたし冷ちゃんの様子見てきますです」

どうも考えこむのは苦手らしいな、と察知した為男は鷹揚にうなずいてみせた。

「……そうしてくれ」

落子が小走りに居間のドアに駆け寄り、まさにノブに手を伸ばした瞬間、

「きゃいん!」と、急にあいたドアに激突した。

「あ、居たの?」と、おでこを押さえてうずくまった落子を横目で見て、冷子が言った。

「もう、いいのか?」と、為男が落子の様子を見つつ訊く。

「もう大丈夫よ」と、冷子はにこにこ笑い、

「わたしは大丈夫じゃないです」と、落子はしくしく泣いている。

すっかり元気を取り戻した色部冷子は、台所に向かうと無造作にエプロンを手に取った。

「何するの?」

「何、って? 夕飯の準備に決まってるじゃない」

「あ、作ってくれるんだ」

急に空腹を思い出したように、おなかをさすりながら為男はうなずいた。

「今日はあたしが当番なのよ」と、冷子が説明し、

「明日はわたしです」と、落子が補足する。

「じゃ、ぼくの当番の日は……」と為男は確認しかけて、冷子の冷たい視線のシャワーを全身に浴びた。「……しなくて、いいのかな」
冷子は相変わらずの態度だったが、目元にわずかに笑みを浮かべていた。

「思ってたキャラと違うわね、随分と」

「それは、どういうこと？」

冷子が答えないので、為男は視線を落子に向けたが、こちらも返事は無い。

「二人がぼくをどういうキャラだと思っていたのか、訊いてもいいかなあ」と、言いかけて、『設定』を思い出した為男は口調を改めた。「説明しろ。命令だ」

困ったような二人を見つつ、為男は付け足した。

「『台本』に書いてないことならいいんだろ？ 会話とか、『設定』とかからはどんな性格が想像できたんだ？ あくまでも、下僕としての『類推』の範囲内で、のことだよ」

「……言ってもいいの？」

「もちろんさ」

「そう、ね。『溢れんばかりの欲望に忠実。乱暴。我儘。下僕を家畜のように扱う人』」

「それはひどいなあ」

「そして『絶倫』」

「ぜ、絶倫？」

——しつこいようだけど、これって一般向けの話だよね。

と、色々な意味で興奮気味の為男の視線を受けて、落子が恥ずかしそうに答えた。

「あの、その、もし大人向けのエッチなお話でしたら、ここでその、

冷子ちゃんとのあれでこれでそれな展開も、きつと強制イベントな
んだろう、と思いますです」

ドジ子にしては妙に説得力のある台詞だな、と為男は感心した。

「ちよつと期待してたのに、残念ね」

くふふつ、と笑うと、為男の反応を待たずして冷子は台所へと消えた。落子が手伝いますです、とあとを追いつ、為男の見えない所からはドジ子が居ると邪魔よ、とか、それはあんまりですしくしく、とか、そんな感じの会話が漏れ聞こえてくる。

為男は座ったまま脱力して、天井をあおいだ。

「なんだか、なあ……」

少々危惧していた夕食の味は割とまともで、というか、ご飯にレトルトのカレーをかけたただけなので不味いわけも無いんだろうけど、それでもおなが一杯になると為男の体には一日分とは思えないほどの疲労が重くのしかかってきた。

「ごちそうさま」

「おそまつさまでした」

「もう、寝てもいいかな……じゃない、寝ることにする」

「どうぞ、ご主人さま。あ、そうだわ。『強制』じゃないけど、一応、台本に載ってるから言っておくわね」

「何を？」

「ええと、『もうわたしは体力の限界ですう。お願いですからあ、少し休ませてえ』」

溢れんばかりの色気を出して言い終えると、

「じゃ、おやすみなさい」

と、冷子は食器を抱えてあっさり身を翻した。

スプーンを口にくわえたままの落子は、顔を真っ赤にしてうつむいていた。

為男は首をふりふり二階へと続く階段を上ると、ぐるり、と周囲

を見わたした。

二階には部屋が三つあって、その内の二つにはそれぞれ下僕の名前が付いたプレートが下がっている。為男は、何も付いてない部屋の扉を開けた。

机、椅子、本棚、クローゼット。そして、整えられたベッドがひとつ。

制服を脱ぎ捨てると、為男はそのままベッドの中に潜り込んだ。

心も体もくたくだった為男は、五分ともたずに夢の世界へと飛び込んだ。

第三章 魔王は強かった――（ 1 ）

朝。

聞こえるのはスズメの鳴き声。カーテン越しに降り注ぐのは春のうららかな日差し。

それはいつそすがすがしい、とさえいえる朝だったけれども、一戸為男はまるで敵地に潜入したスパイのように、目をぐるりぐると動かし、周囲を確認した。

「夢オチ、っていうことは、無いみたいだなあ……」

為男がぼやいたのも仕方がない。いつそ昨日のあれが、ユメやマボロシであつたなら。

――いや、そもそもこの世界が夢や幻で、ぼくは本当は……。

と、そこまで考えて、為男はベッドの上にむっくりと起き上がった。

「ぼくは、本当は……なんだったんだろう」

寝ぐせのついた頭に、Tシャツにパンツ一丁。そのままの姿で、為男は腕組みをしてしばし考え込んだ。

昨日は気がついたら教室に座っていて、当然のように『自分は一戸為男である』と認識して、家に帰るまでにはそれでまちがいない、と確信した。ところが、家の中では知らない事実ばかりを提示されてしまったのだ。

『主人』、『下僕』、『魔王』、『四天王』、
そして『台本』。

――いったい、どうしたものかなあ。

と、為男はうんうんうなった。特に気になる最大の問題は、下僕を自称する女の子ふたりとの共同生活（今まさに進行中）である。外見はまあいいとしても、中身がかなりアレな感じの女の子ふたり

である。いや、アレなのは『台本』の『設定』のせいかもしれないけど……。

不意に為男の部屋のドアがひらいて、

「あら、もう起きてたの、ご主人さま」

と、色部冷子が顔をのぞかせた。どうやら朝からシャワーを浴びたらしく、濡れた髪が白い肌にしっとり張り付いている。

「元氣そうね」

「いや、そうでもないよ……」

「でも、はちきれそうよ」

慌てて、為男は掛け布団で下半身を覆い隠した。

「これは生理現象だから」

意識しているのかしていないのか、冷子は濡れた髪をかきあげた。

「朝ごはんの用意、もうすぐできるらしいわ」

「そうか、わかったよ」

「ただし、今日の食事当番、ドジ子だから」

「……そうか、わかったよ」

料理をドジってないといいけどな、と祈りつつ、流石にこの格好のままだとな、と思った為男は、起きた後でパジャマを着ると階下におりた。

出迎えたのは、どこまでも元氣のいい声。

「あ、ご主人、おはようです！」

「うん、おはよう……」

朝からテンションの高い逆井落子に弱々しく応えようと、朝食ができるまでの間に為男はシャワーを浴びた。汗と汚れと心の涙とを洗い流すと、少しさっぱりとした気分になった。

どちらが用意したのか分からないが、脱衣所には新しい着替えが置いてある。

——次からは、下着くらいは自分で用意しよう。

と、赤面しつつ制服を着た為男が居間に戻ると、満面の笑顔の落

子にむかえられた。

「朝ごはん、できてますですよ」

にへへ、と笑った落子を見て、為男は自分の予想通りの光景に心の中で嘆息した。

逆井落子の指には、数箇所の絆創膏。

机の上の食器の上にあるのは、正体不明の物体。

それでも冷子がわざわざ椅子を引いてくれたので、やむなくそこに座らざるを得なくなってしまった。為男がちよつと逡巡した後、「……これは？」と、おそるおそる皿の上にあるものの正体を訊くと、

「ベーコンエッグです」と、小さい胸を張って落子が答えた。

一戸為男は、ベーコンエッグと称する物体を慎重に観察した。

まず、ベーコンが千切りである。そしてそれが卵と十分なほど混和されている。卵と思しき部分は焦げていて、全体が見事な濡れ落ち葉色を呈している。

更に目を引くのは付け合せのサラダ。見事なまでのレタスの千切り。

——普通、レタスは包丁で切らずに、手でちぎるんじゃないのかな。

と、為男は真剣に考えた。まるでとんかつの付け合せのキャベツのように、皿に山盛りにされても困るのだけれど。

それでも為男は、さあさあ、どうぞどうぞ、と目をきらきらさせながら勧めてくる落子を見て、仕方なしに口に運んだ。

拔群のかたさを持つパサパサの卵と、カリカリになりすぎたベーコン。自分が食べているのはドライタイプのキャットフードかな、などと思いつつ、それでも落子の左手に火傷の跡まであるのを見て、為男は努力して口に運んだ。

冷子はベーコンエッグを一口で放棄すると、後は千切りレタスを無表情に口に運んでいる。そして落子は食パンをおもむろに手に取ったのだが……。

文明の利器バンザイ。

いくらドジ子といえども、ボタンを押すだけのトースターはこうできるものではない。かくして、一番まともなのはトースト、という見事な朝食ができあがった。

格闘の拳句にオレンジジュースで流し込んだ為男を、落子はじつと見つめていた。

「あの、やっぱりおいしくなかったですか？」と、探るような声を出した落子に、

「いや、まあまあだったよ」と、為男は笑って応えた。

もっとも、冷子が容赦の無い態度を取っているので、落子も状況を察しているだろう。少々気まずい感じの空気がたどった後で、落子がしょんぼりと謝った。

「あの、朝ごはんだけで手間取ってしまい、お弁当を作れませんでしたです……」

ここで為男は主人の寛容さを示し、下僕をいたわる言葉を与えた。「いや、購買部で色々買うのも楽しいから、別にお弁当はいらないよ」

「そう、ですか」

ちよっぴりほっとしながらも、どこか残念そうな落子を見て、為男も色々と安心した。

「どうせ今日はお弁当いらないでしょ」

意味不明の冷子のつぶやきを、為男は軽く流してしまった。

昨日初めて学校に居たくせに、行ったことも無い購買部の存在を承知していて、色々楽しい、とか言っている自分は何なのだろう、と考えていたからだった。

『魔王の四天王の筆頭』といっても、一戸為男も所詮は高校生である。

朝食の後は登校することになるわけだが、ここで為男は少し迷った。いくら電車通学とはいえ、三人でいるのを見られてもいいのか

な、と考えたからだ。

だが、冷子と落子が、

「下僕なんだから、同行して護衛するのは当然です」

と異口同音に言うのを聞いて、為男も仕方なくそれを認めた。正直な所、昨日は何も考えずに帰ってきてしまったが、学校への道順に少なからず不安があったというのも、ふたりの同行を認めた理由である。

乗り込んだ電車で揺られながら、為男は丁寧に周囲を観察した。

周囲にいるのはスーツ姿のサラリーマンや、制服姿の学生たち。

まあ、朝の電車内としては普通の光景だ。

——でも『普通』というのは何なのだろう。何をもって『普通』とするのだろうか。

と、為男の中に唐突に疑問が浮かんた。

もしも、為男が全く違う異世界の住人だったら、この光景を『普通』ではない、と思ったかもしれないのだ。

車輪のついた鉄の箱が電気の力で人間を運ぶ、というのは冷静に考えればおかしなものかもしれないし、或いは『人間』という存在自体ですら、本来は違和感を覚えるべきものなのかもしれないのだ。人間にあらざるものがのしと歩き回っている世界や、機械の群れがほいほいとダンスを踊っている世界だって、そりゃあるだろうし。

自分が、この世界を『普通』だと考えている根拠は、いったい何なのか。

行き先を見失いつつあった為男の思考が停止したのは、落子が小さな手を顔の前で振ってみせたからだだった。ほぼ同じ構造を持つ制服を着た人（と思いき存在）たちと一緒に電車を降りると、為男は二人の下僕の後をのこのこと歩いて改札を出た。

忌まわしいことに、下車した駅から学校までの道順をしっかりと覚えていた一戸為男は、下駄箱で二人と別れると自分の教室に向か

った。昨日と同じ席に座ると、まっとうな生徒として過ごし始める。もちろん、為男は真面目に授業など聴く気は無かった。何せ家の中がアレなので、この教室内は一人で考えをまとめることのできる貴重な空間だ、と考えていたのだ。

まずは、為男自身がおかれている状況を整理するところから始めよう、と決意。

——ここは『普通』の学校だよな。

と、思った為男はすぐに小さく舌打ちをした。何が『普通』とか考えるのは止めにしよう、と自分に約束する。『普通』の定義から考えるのは面倒くさいことこの上ないし、大体『魔王』や『四天王』がいる時点で、『普通』の学校でないのは明らかだった。

過去の記憶が無い上に、『台本』も持っていない一戸為男が存在することも十分異常なのかな、とも為男は考えた。もし、自分に中学校や小学校の記憶があって、しかも両親や家族に関する記憶も十二分に与えられていたとしたら、自分はどうか考えただろうか。

——下僕を自称するふたりの精神が異常である、という結論にたどりついたかもしれない。

と、苦笑したところで、為男は慄然とした。不意に、胸の奥に恐ろしい疑惑が首をもたげてきたからだ。

——このぼくの状態そのものが、『台本』の作者の狙い通りなのではないだろうか？

もし過去の記憶があれば、為男は冷子と落子を異常者と決め付けて、下僕として受け容れなかったかもしれないのだ。あの二人を下僕として受け容れ易い精神状態にするべく、為男には不完全な情報しか与えられなかったのだ、としたら。

——いや、それは違う。

と、為男は首を振った。

そもそも、為男に『台本』が与えられていないことそこがおかしいのであって、『台本』があれば、もっとすんなりとあのふたりを

受け容れられたのだ。もし自分に『台本』が与えられていれば、冷子を愛人として認めたのかな、などと考えている自分に気付き、為男は再び苦笑した。

為男だって健全な青少年だから、色部冷子の制服の膨らみやその揺れ具合を思い出すと、甘酸っぱいものが下半身を中心としてこみ上げてきてしまう。おまけに、それは為男の手の届く所にあるらしいのだ。為男さえその気になれば、あんなことやそんなこともできそうな感じである。加えて、もう一人の下僕、逆井落子も状況次第では色々できそうな雰囲気があった。落子は冷子と正反対のプロポーションだけど、あれはあれで……

危ない方向に行きかけた為男の思考が、唐突に外部から停止させられた。

「おい、一戸。一戸為男」

ごく自然に、為男は返事をして立ち上がった。

「はい、何でしょうか先生」

教師が、ちょっと嫌な感じの笑みを浮かべながら言う。

「問四の答えは？」

為男はあまり数学が得意ではなかったけれども、黒板を見て懸命に頭の中で計算して、なんとか答えを導き出した。

「……四百三十七です」

「なんだ、聞いてたのか。てっきり目を開けたまま寝てたのか、と思っただよ」

教室のあちこちから笑い声が聞こえて、為男は赤面して椅子に座った。

何かヘンだな、と小首を傾げながら。

第三章 魔王は強かった――（２）

昼休み。

急に騒がしくなった教室をぼんやりと眺めながら、一戸為男は不審を感じていた。

危ない妄想にそれほど時間を割いた覚えもないのだが、あつという間に午前の授業が終わってしまったからだ。それでも左手でおなかをさすりながら、朝の宣言通り購買部に行こうかな、と考えた為男の脳内に、急激かつ強力に『あるもの』が浮かび上がってきた。

○昼休みに、いつもの場所に集合する。

気が付いた時、為男は席を蹴って立ち上がっていた。

そして、『いつもの場所』へと歩き出す。自分でも驚くほど迷いのない足取り。

自分の意思によらず勝手に足が動くのを感じて、

――強制イベント、か。

と、為男は直感した。まるで何かに引きずられるかのように足は力強く動き続け、『いつもの場所』が存在する旧校舎へと向かっていくのだ。

グラウンドへ出た時、為男は自分が独りではないことに気付いた。いつの間にか二人の一年生の女の子が、自分の三步後ろをついてきている。振り向かなくともその正体に為男は気付いていた。

――冷子と落子も、この強制イベントに参加するんだ。

そういえば朝方、冷子が弁当は要らない、とかなんとか言っていたな、などと為男が洩面で思い出している間に、足と体は旧校舎についていた。

為男が鉄製の重い扉を開け、カビとホコリの臭いが充満する旧校舎の中へと入りこみ、そのまま木製のきしむ廊下を歩いて、『いつ

もの場所』であるひとつの教室に入ったとき、そこには既に先客が居た。

居るのは男子生徒三人。上履きの色から、三人とも同じ二年生である、と分かった。

一人目は、二メートル近い長身で丸刈りの男子生徒。

二人目は、背が低くてメガネをかけた神経質そうな男子生徒。

三人目は、中肉中背で何も特徴のない普通の男子生徒。

男子生徒三人に見つめられ、どうしようか迷っている一戸為男を置き去りに、背後にいた色部冷子がうやうやしい、とさえいえる口調で申し立てた。

「ご機嫌麗しゅう、ふたみさま、さえぐささま、よつやさま」

逆井落子も揃ってぺこり、と頭を下げたのを見ると、今度は男子生徒たちが口を開いた。

「いちのへさまも、お元気そうで何よりです」

「あ、ああ……まあ」

困惑しつつも、かろうじて手をかかげて応じた為男は、慌てて冷子の腕を肘でつついた。

「こ、この生徒たちは何なの？」

やや青い顔をしている為男を一瞥した冷子は、無造作に言った。

「苗字を考えれば分かるでしょ、四天王よ」

「……！」

いちのへは一戸。

ふたみは二見。

さえぐさは三枝。

よつやは四谷。

——酷いネーミングセンスだ。

と、為男は軽いめまいを覚えつつ、懸命に意識を保って冷子に訊いた。

「ぼ、ぼくはこの三人に対してどう振舞ったらいんだ？」

「あなた、四天王の筆頭なのよ？ この三人に対しては偉そうにしてればいいわ」

為男は頭を抱えなくなった。主人としての立場もそうだが、偉そうにするのは為男の得意とする所ではないのだ。

だが、その苦悩も長い時間ではなかった。廊下にやけに堅い靴音が響き渡り、為男がなんだなんだ、と思っているうちに教室の扉が乱暴に開かれたのだ。

「おう、おめえら、揃ってんじゃねえか」

と、ぶっきら棒に入ってきた生徒を見て、為男は心底おどろいた。その生徒は、きょうびあるうことかりーゼントで、ソリまできつちりと入っていた。更に上着は短ランで、そしてズボンは普通のもの倍くらい太さがある。いわゆる、ボンタンだ。

——今時、こんな不良が絶滅しないで残ってたのか！

と、半ば感動さえ覚えた為男の視界が、急に一段低くなった。誰かが何かしたわけではない。為男自身が、勝手にその場にひざまずいたのだ。

一戸為男は四天王で、しかもその筆頭である。

冷子の話を聞く限りでは、残りの四天王の三人にも偉そうにしていいらしい。

——とすると、このぼくがひざまずいたということは……。

「たしかメン合わせんのはこれが初めてだよな、ああ？ オレが『魔王』の王野悪人だ」

と、不良がいかつい声を出した。必死に衝撃に堪えている一戸為男を含めた四天王と下僕たちに、容赦の無い声が掛けられる。

「っていうかよ、オレ『台本』読んでねえんだよ。あんな字の多いの読んでられっかよ。せめてマンガにしろ、って感じじゃね？」

と、王野悪人はひときわ下品な笑い声を上げたが、瞬時にそれを

おさめると、

「お前らも笑えよ」

と、冷たく言い放った。自分も含めてその場にいた全員がぎこちない笑い声を上げるのを聞いて、為男は絶望的な気分になった。

居並ぶ部下たちの反応にも構わず、やおら王野はポケットからくしを取り出すと、茶蓋のポマードをたっぷりと付け、それを髪にこつてりと付けると、さらにねっとりとなで付けた。キラキラ光る王野の髪から出た油の臭いが、教室内に充満していく。

「よし、上等だぜ。おめえら自己紹介しろ。オレがこきつかってやるよ」

王野はタバコのヤニで真っ茶色になった歯を、猿のようにむき出してみせた。

「弱い順に挨拶しなっ」

その声に震えながら立ち上がったのは、為男と同じくらいの背丈の生徒。

「あ、ボ、ボクは四谷並夫です。四天王の、四番目です」

顔面蒼白で汗びっしょりの四谷に心から同情しつつも、為男は慎重に様子をうかがった。

「おめえ、弱そうだな、ああ？」と、王野が声を荒げると、

「す、すみません……」と、四谷は涙声を返した。

そんな四谷に容赦無い視線を向けていた王野は、毒蛇のような笑みを浮かべた。

「おうおめえ、ちょっと購買部行ってパン買ってこい」

「え、ええ？」

「文句あんのかよ、上等だぜっ」

再び汚い歯をむきだした王野を見て、四谷はふらつく足取りで教室を出て行く。

「次は？」

やる気の無い王野の声を受けて立ち上がったのは、メガネの生徒。
「僕は三枝はかり、四天王の三番目です」

「はかり? 『はかり』って、どんな字書くんだよ、ああ?」
ずれてもいないメガネを丁寧中指で直すと、三枝は答えた。

「『謀』っていう字です。謀略の謀、ですよ。僕は名前の通り策謀や謀略が得意なんです。僕の頭脳を使って、色々とお役に立てるか、と思いますか?」

三枝も歯をむき出してみせたのは、『魔王』たる王野へのゴマスリであつたようだが、

「おめえみたいなヤツはよ、オレが一番嫌いだぜ」

と、笑いもせずに吐き捨てた王野を見て、自称謀略家は青い顔でひざまずいた。

直後に、指名もされていないのに長身の人物が立ち上がる。

「オッス! 自分は二見肉雄、四天王の二番目っス!」

「おお、おめえ、でかいじゃねえか」

と、王野に言われた二見は、突如として躊躇も見せず上着とシャツを脱ぎ始めた。何が始まるんだ、と思う間も無く、上半身裸になった二見はポーキングを決めた。

「オッス! 自分は頭悪いので、この筋肉が全てっス! 細かいことはできませんが、喧嘩だけは自信があるっス!」

隆々と盛り上がった筋肉を見て、王野は嬉しそうに下品な笑い声を上げる。

「おめえ、気に入ったぜ」

「オッス! ありがとうございまっス!」

狭い教室内だというのに、旧校舎の外まで聞こえそうな大声を二見は出した。

「じゃ、最後だな、ああ?」

為男は震える足を必死に動かして立ち上がると、言った。

「ぼくは一戸為男です。四天王の、その……筆頭です」

「ふうん。で、後ろのアマは?」

「は、はい? ああ、ええと……下僕の、色部冷子と逆井落子です」
王野はいやらしい視線を動かすと、とんでもないことを言っ

けた。

「いいアマ連れてんじゃねえか、オレに寄こせよ」

「……は、はあ？」

魔王が汚い舌で唇を舐めるのを見て、為男の背中中は総毛だった。

——こ、こういう展開なのか？　こういう強制イベントなのか？　狼狽しきりの為男を救ったのは、冷静な下僕の声だった。

「申し訳ありませんが、そのような『設定』ではございません、王野さま」

「おめえ、いい体してんじゃねえか。オレのスケになれよ。楽しませてやるぜ」

魔王の雑言にも冷子は動じる気配は無い。冷えた声で断じる。

「『台本』上、そのような行動は許されておりませんっ」

驚いたことに、『台本』の二文字を聞いた王野は一步引いた。

「くそ、なんで魔王のオレが独りで、手下のてめえがスケ連れてんだよ、ああ？」

「『台本』上、そのようになっております」

「……ちっ、しかたねえな。クソったれめ」

それを聞いた為男は内心で拍手喝采。

——恐るべき『台本』パワー。魔王ですら、『台本』には逆らえないんだ！

と、ひとまず胸を撫で下ろした為男の耳に、ドアを弱々しく開ける音が聞こえ、

「あ、あの、とりあえず焼きそばパンとカレーパン買ってきました」

と、蒼白を通り越して鉛色の顔をした四谷が顔を覗かせた。

「寄こせ」

と、命じると、四谷の返事を待たずして王野はパンの入った紙袋を奪い取る。

「……あの、お金は？」

四谷の蚊が鳴くような声を聞いて、王野は茶色い歯と黄色い舌をむき出した。

「ああ？　なんか文句あんのかよっ」

「な、な、なんでもありません……」

四谷の反応を見て満足そうに笑うと、王野はそのまま外に出て行くとしたが、そこで三枝が出した慌てた声がストップをかけた。

「あ、あの、王野さま。たしか今日、我々はここで大事なご命令を頂くのですが」

「ああ？　……そうか、『台本』にそんなこと書いてあったかもな」
音高く舌打ちした王野は、面倒くさそうに口を開いた。

「ええと、あれだ。おめえら、学校に『勇者』とその一味がいやがるんだ。やつらはオレの命を狙ってやがるらしい。そいつらを探し出して――」

王野が教室に居る全員を見渡す。

「――ぶっ殺せ」

「こ、殺す？」

反射的に叫んだ為男は慌ただしく視線を動かしたが、残りの四天王から帰ってきたのは

――何驚いてるんだ、こいつ？　当然のことだろ？

と、いう視線だった。

「そ、そんな……」

「てめえ、一戸とかいったな。オレに逆らうのかよ」

「い、いえ……」

「よしわかったぜ、力の違い、ってやつを見せてやる。上等だぜっ」

王野が口の端に薄笑いを浮かべたまま、為男にゆらゆらと近付いてくる。反射的に歯を食いしばった為男にぶつけられたのは、拳ではなく言葉だった。

「てめえ、確か妙な力があるはずだろ、ああ？」

「みよ、妙な？」

「使えよ、おい！」

混乱寸前の主人を見て、色部冷子が冷静な声を出した。

「ご主人さまは、キャラの『レベル』を見抜く能力をお持ちです」

「の、能力？ ど、どうしたらいいんだ？」

「強く念じてください。相手のレベルを見たい、と」

迷いながらも、ええい、ままよ、とばかりに為男は強く念じた。

その瞬間、まるで何かスイッチでも入ったかのように、為男の視界にフィルターのようなものが掛かった。

あわわあわわ、と狼狽する為男の視界に見えたのは、教室に居る生徒たちの頭の上に浮かぶ数字だった。

色部冷子の茶色がかった髪が作り出す、綺麗なウェーブのすぐ上。

「『10』っていう数字が見えるけど、これが……」

「そう、それがあたしの『レベル』です。その状態になれば『能力』が発動してる証拠。他の方々の『レベル』も見れるはずです」

為男は、視線をショートカットの女の子に向けた。

逆井落子 レベル 10

——落子は冷子と同じレベルらしい。

覚悟を決めた為男は、教室の中をぐるり、と視線を動かす。

四谷並夫 レベル 35

三枝 謀 レベル 75

二見肉雄 レベル 150

——これが、四天王の実力か。

頷いた為男に、無言のまま流れるような動作で冷子がコンパクトを取り出し、中の鏡を主人に示した。まだ昼だから、そこに映ったのは人間の姿。その頭の上には……

一戸為男 レベル 399

——思ってたより、遥かに高いぞ！

それが、為男の正直な感想だった。単純に下僕のおよそ四十倍の力があることになる。為男の頬がわずかに緩んだが、それもつかの間だった。

鏡の中に、油ぎったりーゼントが入り込んできたのだ。

「オレはいくつだよ、ああ？」

そこに見えた数字を見て、為男の頬は瞬時に引きつった。

「王野悪人……さま、レベルは999です」

「わかったな」

息がかかるくらいの距離で、王野はいやらしく唇をねじ曲げた。

「……はい、王野さま」

ポマードとタバコの臭いの中、失神寸前の頭で為男は答えた。

王野は色部冷子をなめまわすようにして眺めると、パンの紙袋を抱えたまま出て行く。

一戸為男は、残る三人の四天王が別れの挨拶をするのにも気付かないまま、ふらふらとした足取りでその場を離れた。

それから為男は、どうやって教室に戻ってきたのかもよく覚えていない。

午後の授業が始まったことにも気付かず、為男は頭を抱え込んだ。考えたのは『魔王』の命令のことだけ。

王野が下した命令は、『勇者』の殺害、つまり人殺し。

——『魔王』の力は圧倒的だ。ぼくたちは、ただ命令に従うしかないんだ。

たとえ『魔王』とその部下という『台本』上の『設定』が無かったとしても、あんな王野みたいな奴に為男が抵抗できる、とは思えなかった。為男は自分が置かれている状況を把握し、その恐怖に吹き出る汗が止まらなくなった。

隣の席に座っている女子生徒が、為男を心配そうに見ている。

「どうしたの？ 気分悪いの？」

小声で問われ、為男は同じような小さな声で答えた。

「大丈夫。何でもないよ、木村さん」

蒼白な顔で汗を拭った為男は、その会話の異常さに気付かず、自分を抑えることに専念した。

――落ち着け、落ち着くんだ、一戸為男。

そもそも高校に『魔王』や『勇者』が居ること自体がおかしいのだ。当然、『四天王』なんてものが居ることもおかしい。更に人間に『レベル』があるのだからおかしい。

こんなおかしい世界では、『殺す』というの何か別の意味があるのかもしれないし、もしかしたら何か抜け道もあるのかもしれないのだ。案外、お金を払えば教会やお寺で死人を生き返らせることだってできるかもしれないんだぞ、と為男は自分に言い聞かせた。

授業終了の鐘と同時に、一戸為男は教室を飛び出した。殺人命令から逃れるすべを求め、『台本』を持っている二人の下僕から情報を聞き出そう、との決意を抱いて。

一年生の教室を探して歩き出した為男のすぐ横を、一人の男子生徒が通り過ぎていく。

「一戸、もう帰るのか？」

「ああ、うん。ぼくは帰宅部だからね」

「お前もいい加減に部活に入ればいいのに」

「いいよ。加藤みたいに運動神経よくないから」

「そうか、じゃあこれから部活だから。また明日な」

「さよな……らああああ？」

よどみ無く会話をこなした後で、為男はひどく嫌なことにとうとう気付いてしまった。

昨日と同じ相手。昨日と同じ台詞。今更気づいたが、それはこの生徒だけではない。

クラスメートも教師も、同じ会話しかしていないのだ。

新たに増えた不安の種に泣きたい気持ちになりながらも、万に一つも偶然が重なっただけなのかもしれない、と思い、為男は他の生

徒とコンタクトを取ろう、と思い立った。

さしあたって、すぐ目の前を通るちよつと可愛い系の一年生の女の子に声を掛ける。

「ねえ、ちよつと」

「……………」

返事はない。為男は懸命に隣りを歩きながら話しかけた。

「ゴメン、ちよつとでいいんだけど」

「……………」

それでも返事がないので、やむなく為男は女の子の前に立ちはだかった。

「ちよつとでいいんだ、止まってくれ！」

その大声に女の子が立ち止まる。微量の安堵を籠めて為男は女の子の顔を見て、そしてそのまま凍りついた。

目の前に居るのは、まるでマネキン人形。ガラス玉のようなうつろな目をしている。

「無駄よ」

その冷えた声に振り向いた為男が見たのは、腕組みをしたグラマ―な一年生の女の子。

「冷子、か」

「無駄だから。どいてあげないと可哀想よ」

「は？」

色部冷子は主人の返答を待たずして、その手を強く引いた。マネキン人形の女の子が、再び真っ直ぐに歩き始める。

「向こうは、障害物、としか思っていないから。ただ、邪魔なだけ」

「しょ、障害物？ どういうことなんだよ！」

力無い声を大きく張り上げた為男を、冷子は微かな同情を籠めて見つめた。

「あのね、言ったでしょ？ 雑魚キャラには『台本』なんて無い、って」

「あ……あれが、『台本』が無い、っていうことなのか」

為男がさつき声を掛けた女の子は、規則正しい動きで歩いていくと、階段の所で直角に曲がり、その姿を消した。

——あんまりだ！　いくらなんでも、ひどすぎる……。

気の遠くなりかけた為男の意識をひっぱたいたのは、元気一杯の声。

「キャッホウ！　ご主人、はっけーん！」

逆井落子が満面に笑みをたたえて、びしっ！　と為男に人差し指を突きつけている。

「……帰りましょう、ご主人さま。ここに居てもしょうがないわ」
段差も無いのに転びそうになりながらも、懸命にこちらに走ってきて、見えない尖った尻尾をぱたぱた振りながら擦り寄ってきた落子を合わせ、為男は二人に左右を支えられるようにして校門をくぐった。

第四章 転校生は唐突に――（ 1 ）

再び、朝。

聞こえるのはスズメの鳴き声。カーテン越しに降り注ぐのは春のうららかな日差し。

すがすがしい希望に溢れる朝、のほほであるが、一戸為男は寝たまま舌打ちした。

――この状況で、ぼくは熟睡できてしまうらしい。

昨日はあれから家に帰り、二人の下僕にあらん限りの質問を浴びせたのだが、ひとつとして要領を得た解答を得られなかった。それはもちろん、下僕の女の子たちが『禁忌』の存在により直接的な解答ができなかったせいでもあるのだが、為男の方も粘り強く質問を続けるだけの気力が残っていなかったせいでもあった。

結局、初日同様に夕食を食べたところで為男は見事にダウンして、夢の世界へと戦略的撤退を余儀なくされたのだった。

「せめてまだ、『台本』を持ってればなあ。どうしてぼくだけ無いらんだろう？」

寝ぐせのついた頭に、Tシャツにパンツ一丁。そのままの姿で、為男は腕組みをしてしばし考え込んだ。

小気味いい軽やかな足音の後で、為男の部屋のドアがノックされる。

「あ、ご主人、起きてますですか？」

と、逆井落子が丸い顔をひょっこり覗かせた。為男はちょっと考えると、

「あれ、今日は……ああ、そうか。ご飯当番は交互なのか」と、確認した。

「そうです。今日は冷ちゃんが……」

と、言った落子は視線を下にずらすと、

「きゃいーん！」

絶叫の後、回れ右をすると慌てて階段を駆け下りていった。

為男はのろくさと視線を下にずらして、

「これは生理現象だから」

と、自分しか居ない部屋で独りつぶやき、ぼりぼり頭をかいて、

「今日の朝ごはんは、軽いものだといいいけどなあ」

と、ぼやいておなかをさすった。

昨日の夕食は落子が腕によりをかけた傑作、

『特製！ 何が入っているのかよく分からないクリームシチュー

』 明らかにルーの分量を間違えたものと思われる風 』

であり、それはもう思う存分、といった感じで為男の胃にもたれていたのである。

「朝ごはん、できてるわ」

昨日同様にシャワーで眠気を吹き飛ばした為男を出迎えたのは、色部冷子だった。

「ああ、うん」

為男はなるべく冷子の目を見ないようにして答えた。

というのも、昨夕も『設定』通りに冷子の『夜のお誘い』があったからで、為男は丁重にお断りし、深くお詫び申し上げたのだが、気まずさだけはぬぐい去ることができなかった。

今も冷子は大きな胸を抱え込むように腕組みをして、少々怒ったような顔を浮かべているわけだが、それにも深い意味があるのか、それとも無意識の動作なのか、為男にはまったく判別がつかない。

為男はほとんど逃げるようにして、落子が引いてくれた椅子におさまった。

「……ふむ」

そんな為男が思わずうなずいてしまったのは、目の前の机に並んでいる料理がえらくまともな和食だったからである。

ご飯にお味噌汁、魚の塩焼きにお漬物、それにこの小鉢は……

「レトルトだから」

「……は？」

「ご飯以外、全部、レトルト」

機先を制されてしまった為男は、もごもごと感想を述べた。

「最近、魚の塩焼きとかもレトルトなんだ」

「そう、レンジでチン」

冷子と二人だけで話をしていて、ふとひとり足りないのに気付いた為男が視線を動かすと、逆井落子はタッパーのようなものにせつせと何かを詰めこんでいる。

「何してるの？」

「あ、お弁当です。ちょっと寝坊したので、おにぎりだけですけど」

と、寝癖のついた頭で落子が応じた。為男はちょっと考えて、

「お弁当の当番、食事当番とは違うのか？」と、訊いた。

「お昼はいらないんじゃないの？」と、冷子が眉をひそめたので、

「え、まあ、そうだけど。ぼくはどっちでもいいけどさ」と、為男が肩をすくめると、

「えへへ、わたしはちょっと購買部が苦手なので」と、落子が口をすぼめた。

あんな高校でもお昼時は購買部でパンの争奪戦でもやっているのだろうか、だとすれば落子みたいなドジっ子はちょっと大変だろうな、と為男はぼんやり考えたが、あたかもアンテナのように立っている落子の後ろ髪が気になったので、努めて優しい口調で言った。

「時間ないなら、無理してまでお弁当作らなくてもいいよ」

「そう、ですか。一応、ご主人のぶんも作ったですが」

ちよっぴりほっとしながらも、どこか残念、そんな表情を落子は浮かべた。

学校へ行くと、今日も気持ち悪いほど、あっという間に午前の授

業が終わって昼休みになった。なんだかまるで、時間の感覚が狂ってしまったようで為男は不快感を覚えたのだが、そんなときでも不思議とおなかはずくらしい。

昼休み、為男は購買部で菓子パンを買い求めた。幾ら『魔王』の部下の『四天王』、それも筆頭といえども、それほど美食にこだわるわけではない。というか、普通のものが食べられれば十分である。購買部の看板が出ている部屋に無造作に入った為男は、機械を連想させる居心地の悪い声に出迎えられた。

「いらっしやい！　なんに　しますか？」

「ええと、じゃあジャムパン」

「ほかに　なにか　ようは　あるかい？」

「はい。あと、コロッケパンで」

「ほかに　なにか　ようは　あるかい？」

「……いいえ。無いです」

「ありがとう　また　きてくれよな！」

落子が苦手だ、と言った意味が、為男にもなんとなく分かった。無言で牛乳パックを吐き出す機械の方が、まだましに思えてくるのがちよつと忌々しい。

気分転換がしたくなった為男は、今日みたくない天気の日は、のんびりと日光浴でもしながら昼食としゃれ込むのも悪くない、と思ひ、菓子パンとパック入りの牛乳を抱えて屋上へと続く階段を上り始めた。

踊り場で逆井落子とぼったり出くわして、為男は内心で眉をひそめつつも、子犬のように擦り寄ってきた落子を追っ払おう、とは思わなかった。落子は主人たる自分の機嫌を損ねるような真似はしないだろう、という読みがあったからだし、それに独りさびしくご飯を食べるくらいだったら（外見は）可愛い後輩の女の子がそばにいても話し相手としてはいいだろう、と思ったからである。

少なくとも、為男は自分ではその『つもり』だった。

しばしの間、小春日和の日差し降りそそぐ屋上で、為男は菓子パンを咀嚼しては牛乳で流しこむ、という動作に没頭した。落子はとうやら手製と思われるおにぎりをはむはむ、と食べている。為男はタッパをのぞきこんで、訊いた。

「ドジ子、五個も食べられるのか？」

「あ、たぶん無理です」

落子はそれ以上言わなかったが、主人たる為男はここで明敏さを見せた。

「そういえば、朝方、ぼくの分も作ってたって言ってたよね」

「です」

「ひとつ貰ってもいい？」

「キャッホウ！　ひとつといわず、幾らでもさあさあ、どうぞどうぞ、です！」

にぱぱ、と笑って落子が差し出したおにぎりを手に取った為男は、まずは冷静に観察。

複雑怪奇な幾何学模様を形作るそれをながめた後、それでもまあ味は問題ないだろう、と思って為男は一口頬張った。

「うまい、な」

にへへ、と笑ったところを見ると、落子はその言葉をお世辞、と受け取ったらしい。

でも、違う。不思議なことにそのおにぎりは、怪しい購買部で買ったパンよりも、遥かにおいしかったのだ。

結局、おにぎり五個のうち三個を為男が、二個を落子が食べた。

明日からおにぎりでもいいから弁当作ってくれ、と言われて、落子は今にも天にも昇りそうな表情でくると踊り始めたので、屋上のフェンスを乗り越えて下に落ちる前に、為男は慌ててその怪しいダンスを止めさせた。

第四章 転校生は唐突に――（ 2 ）――

青い空、そして白い雲。

「平和だなあ」

「です」

おなががいっぱいになった後はすっかり落ち着いてしまい、しばし、揃って口をあけてぼーっとしていた主従の視界の隅で、屋上の扉がひらくのが見えた。

まあこんないい陽気だから、こんな場所に来る物好きがいるのもしかないかな、などと、自分のことを高く棚の上に放り上げて為男が納得したとき、その女子生徒はゆっくりと為男のほうに近づいてきた。

思わず為男が口を閉じて座りなおしたのは、その女子生徒がよく見れば結構、いやかなりの容姿の持ち主だったからで、

――絵に描いたような美少女だ。

と、為男は軽く感動した。ファッション誌で流行の服に身を包み、にっこりと笑っていてもおかしくないが、グラビア雑誌で水着に身を包み、うっふんとポーズを取っているのはちょっと想像できない、そんな感じの、今時珍しいどこか清楚な雰囲気をもし出している美少女。リボンの色から判断するに、どうやら一年生の女子生徒のようである。

――今年の一年生は、『当たり』らしいな。

と、為男は独りうなずいた。冷子も落子も外見だけはかなりのものの、と思っていたけど、この子はどこかそれを上回る素質を持っている、とっていいかもしれない。こんなレベルの美少女が普通に教室を闊歩しているとすれば、一年生がうらやましい限りである。

その女の子が、風であおられて顔にかかった、長くてまっすぐに綺麗な髪をちよっとかきあげながら、ほんの少しだけ上目遣いで為男に声を掛けてきた。

「あの、もしかして……二年生の、一戸為男先輩ですか？」

しみじみとして、為男はうなずいた。もしも天使のような声があるとすれば目の前の女の子の声がまさにそれで、つつい冷子や落子と比較してしまったとすれば、それは悲しい男のサガというべきものであったかもしれない。

「そう、だけど。君は？ 一年生、だよね？」

「ああ、良かった。私、あなたのことを探していたんですよ」

——うおおお！

と、思わず為男は内心でタマシイの叫びをあげてしまった。もしかしてこの子も『魔王』の一味で、為男の新しい下僕、という『設定』なのではないだろうか？

その内心を読んだかのように美少女が軽く微笑むと、ちよっぴり恥ずかしそうに為男の目を覗き込んで、そして優しくささやいた。

「あなたは、人類の敵です」

為男が反応するより早く、美少女は両手を重ねて胸にあてがうと、切ない声で続けた。

「だから今、ここで死んでください」

美少女が口を閉じると同時に、空が暗い灰色に染まる。

ただ混乱するだけの為男の耳に、まるで携帯の着メロのような、安っぽい電子音がうるさいくらいに聞こえ始めた。

校内放送ではない。校内放送は屋上まで聞こえないはずだ。そもそも校内にしか聞こえないのだから、校内放送なのであって。

くだらない思考に捕らわれかけた為男が自分を取り戻したのは、急に逆井落子が両手を広げ、為男の前に背を向けて立ち上がったからである。

「ド、ドジ子。何してる？」

「気をつけてくださいです！　もうバトルのテーマが流れてますです！」

「は、はあ……？」

「もう、戦闘シーンに突入してますです！」

ひっきりなしにアップテンポの電子音が流れる中で、落子が指さす先、いつの間に入ってきたのか屋上には知らない男子生徒が二人。手にはそれぞれ棒状のものを握っている。

そのうちの一人、背の高い男子生徒が「どうなんだ、『僧侶』美優！」と、問う。

天使のような少女が「こいつが四天王の筆頭よ、『魔法使い』智則！」と、応える。

残る男子生徒が「どいてろ、オレがやる、やってやるぜ！」と、叫びながら、持っていた棒状のものを引き抜いた。

出てきたのは、金属製の物体。

そんなもの、為男はアニメやゲームの世界でしか見たことが無い代物だった。

見事に輝く大振りな『両刃の剣』。

——なに、これ？

脳内が完全に漂白された為男に容赦なくその剣先が向けられ、

「お前を殺す！」

との、ありがたい宣告がくだった。

智則と呼ばれた男が「独りで先走るな、『勇者』勇太！」と、戒める。

美優と呼ばれた少女が「そうよ、チームワークで！」と、同意する。

そして勇太と呼ばれた男が「くそ、分かってるよ！」と、剣を構えたまま一步引く。

——高校生にもなって、ヒーローなりきりごっこ、か？

と、為男はあきれ果てたが、三人の顔はいたって真剣である。そして、逆井落子の顔も。

「まず、俺が牽制しよう！」

と、叫びつつ、智則が持っていた棒状のものを振りかざした。よく見ればそれは木製でねじ曲がった不思議な形をしていて、いわゆる魔法使いの杖、と呼ばれる物体であった。

まだ現状が把握しきれていない為男の目の前で、智則の胸のあたりに小さな火の玉が湧き上がった。それはどんどん大きさを増していき、人頭大になったところで、

「くらえ！ 炎の魔法！」

という掛け声と共に、燃えさかる物体がまっすぐ為男に向かって飛んできた。

為男がそれを見ても一步も動かなかったのは、足がすくんだからではない。ましてや、迎え撃とう、と思ったからでもない。ただただ、

——なんなの、これ？

と、ハテナマークに思考を占領されていたからだ。だが、

「わたしが防御魔法を張りますです！」

と、叫んだ落子がその炎の玉の射線上に立ったとき、瞬時に為男のスイッチが入った。

「危ない！ 何してるんだ、よけろ！」

その主人の声に思わず振り返った落子を見て、

——これは間に合わない！

と、直感した為男は、迷うことなく逆井落子を左手に抱えて、跳んだ。

それはむしろ、飛んだ、といった方がいくらかいの見事な跳躍であったが、その飛距離と力強さがたたってしまい、着地は無様に失敗した。

それでも為男は本能的に自分の身を下にして、落子の体が堅い屋上の床とキスするのを避けた。背中じゅうに走る激痛に顔をしかめた一戸為男の視界に飛び込んできたのは、両刃の剣を構えて走り込んできた『勇者』の男子生徒。

痛みをこらえつつ、再び避けようと立ち上がりかけた為男の視界がさえぎられる。

「ご主人には、指一本とて触らせないです！」

主人と勇太の間に立ちほだかり、まさに己の身で剣を受け止めようとした落子を見て、とうとう為男はキレた。

「お前ら、いい加減にしろ！ 女の子に何しやがる！」
力の限り、腹の底から怒鳴りつける。

まるで電流でも走ったかのような衝撃が屋上を通り抜け、その場に居た為男を除く全員が硬直した。聞こえていた鬱陶しい電子音のバトルテーマも、遙か遠くで鳴り響いているかのように小さく聞きとれなくなる。

まるで時間が止まってしまったかのような空間の中で、為男は数字を見た。

『魔法使い』智則、『僧侶』美優、『勇者』勇太。

その三人の頭上に浮かんだ数字は、全て『16』だった。

それを確認した瞬間、一戸為男は『にげる』ではなく『たたかう』を選択した。

強く床を蹴って勇太との間合いを一気に詰めると、横からタックル。そして走って智則に突っ込んでいくと、持っている捻じ曲がった杖をかわしざま、腹にパンチ一発。最後に再び跳躍して美優に近付くと、さすがに手加減して、片手で軽く背中を突いた。

そしてバックステップして下僕のそばに舞い戻ったとき、

「うわあ！」

「かはっ！」

「きゃあ！」

と、三者三様の叫びを上げて、三人組はもんどりうって倒れ込んだ。

「ご、ご主人……あの……」

何か言いかけた落子を背中にかばうと、為男は拳を握り締めて構えを取った。為男は武道の経験なぞないが、それでもやれる、と思

っていた。

「く、くそ……『台本』じゃ、俺はやられないはずだぞ」

と、腹を押さえてうめいている『魔法使い』智則に、『僧侶』美優が鋭く言った。

「ちよつと、そんな台詞じゃないわ!」

「え? ああ、そうか」

と、『魔法使い』智則はそれでもまだ腹を痛そうにさすりつつ、
「今のレベルでは勝てそうに無い。奇襲は失敗だ」と、感情の無い声で言った。

「いや、まだ俺はやれるぜ!」と、大きいが抑揚の無い声で『勇者』勇太が応じる。

「まだチャンスはあるわ! ここは引いて!」と、『僧侶』美優は叫んでみせたが、その声も演技くさがぶんぶん匂っていた。

「仕方ねえ、にげろ!」

その元気がいいだけの勇太の声を合図に、三人組は屋上の扉へと駆け込んだ。それと同時に電子音と灰色の空も消え去り、屋上にはふたたび穏やかな日差しが降りそそぎはじめた。

第四章 転校生は唐突に――（ 3 ）

周囲の安全を確認すると、為男は爆発寸前の表情で振り返った。

「何であんなことしたんだ、危ないじゃないか！」

「で、でも……あの程度の炎の玉なら、わたしの防御魔法で防げますです」

「なら、その後の剣はどうなんだ！」

「あれは……その、ご主人が『台本』と違って、わたしをかばって跳んだりするから……」

「いい加減にしろ！　もう少しで大ケガしたのかもしれないんだぞ！」

一戸為男は感情の赴くまま声の限りに怒鳴りつけて、
そして後悔した。

真っ青な顔になった逆井落子が、ぶるぶる震えながら屋上の床にはいつくばって土下座をし始めたからだ。為男が発した怒りの『闘気』を、まともに受けてしまったらしい。

やがて嗚咽が聞こえ始めて、為男は当惑してその背中をそっと撫でた。

「悪かった、怒って悪かったからさ、立ってくれ、泣き止んでくれよ」

為男は泣きじゃくる落子をそっと床にすわらせつつ、

――ぼくは怒ることも許されないのか。

と、内心で真剣に愚痴った。

「ほら、もう泣き止めよ」と、主人に命ぜられた落子は泣くのはやめたが、顔色は元に戻らなかった。むしろ青を通り越して土気色に近くなりつつあり、回復の気配は無い。

「保健室、行くか？」

返事は無い。

カチカチ、と歯が震えて音を立てているのを聞いた為男は、仕方

なく落子を背負った。おそらく歩くこともできないだろうから、自分がこうして保健室まで連れて行くしかないのだ。幸いなことに、落子は小柄なので背負って歩くのに苦は無い。

背中越しに伝わってくる震えを感じ取って、良心の呵責に苛まれながら屋上の扉を開けた時、為男の目の前にはひとりの女子生徒が立っていた。

為男の全身に、電流のように緊張が走る。

――落子を背負ったままで、戦えるだろうか？

背中 of 落子を刺激しない程度に怒りをこめて、為男は目の前の『僧侶』をにらみつけた。

「待って、そんな目をしないでよ。もう強制イベントは終わったから、何もするつもりは無いの」

と、『僧侶』の少女は両手を挙げて、無抵抗を示してみせた。

「なんで、ここに居るんだ？」

「少し、気になったからよ。『台本』とイベントの進み方が違かったし。それに――」

と、言うのと、挙げたままの右手で為男の背中 of 人物をさし示した。「――逆井さんは同じクラスの友達なの。だから、いくら強制イベントとは言え、一応謝っておこうかな、と思ったんだけど」

演技を感じさせない、感情のこもった声。為男はその少女を慎重に観察して、嘘は言っていない、と判断した。

「きみ、名前は？」

「私？ 私は佐治美優。さっきも聞いたとおり、一応『僧侶』ということになってるわ」

「そうか……い、いや、ちょっと、ちょっと待ってくれ！」

「急にどうしたの？」

「さっきのあれ、強制イベントだったのか？」

美優は、まるで落子のように目を丸くしてみせた。

「まさか『台本』読んでないの？」

「え？ い、いや、ちょっと……」

——そんな、莫迦な！

内心で為男は悲鳴を上げた。昨日の昼休みの『魔王との接見』は、たしかに足が勝手に動いていく、という印象があった。しかし、今日は違う。為男は自分の意思でここに来たはずだった。天気の良い屋上でご飯を食べよう、そう考えただけのはずだったのだ。

しばらくの間、美優は幼稚園の保母さんのような目で為男を見ていたが、

「なあるほど。それで、さっきのイベントの進み方がちょっとおかしかったのね」

と、両手を腰に当てて目を細めたので、為男はゴメンナサイ、と首をすくめてしまった。

「……ところで逆井さん、具合悪いの？」

「え？ ああ、まあな」

「もしかして、さっきの戦闘で……」

「いや、違うんだ。ぼくが怒ったせいで、『闘気』にあてられてしまったみたい。少し休めば治る、と思うけど」

「それなら、私が保健室に連れて行くわ」

今度は為男が目を丸くした。

「おいおい、さっきは死んでくれ、って言ってたじゃないかよ」

「だってあれは強制イベントだし。そういう台詞が書いてあるんだもん、仕方ないでしょ？ それにあなたも少しくらいは『台本』読んでるんでしょ？ 私が逆井さんに危害を加えられないのは、よく知ってるはずでしょ？」

美優が手を伸ばし、為男の背中からずり落ちそうな落子の体を支えてくれた。

「もしあなたの『闘気』にあてられたのなら、あなたから離れたほうが早く治るから……」

美優が優しく落子の背中を撫でるのを見て、迷った挙句に為男は落子の体をたくした。

別に美優の容姿にだまされたわけではない。その口調、態度、ど

れをとつても嘘はついていないと思えたし、今も落子を介抱する様子は、まるで家族に接するかのように真剣だったのだ。

美優に肩を支えられながら保健室へと向かう落子を見て、

——『台本』で当たり前だ、と言われてもなあ。

と、為男はため息をついた。

ともかくにも憤懣やるかたないまま、昼休みは終わってしまった。

仕方ないので、また授業中にさっきの出来事を整理しよう、と為男は思っていたのだけれど、鐘と同時に教室に入ってきた担任教師の唐突な発言は、それを許してくれなかった。

「悲しいお知らせがあります。安達さんと上野さんが転校することになりました」

数瞬の空白の後で、為男は慌てて自分の席の前後を見た。

席は、アイウエオ順である。一戸為男は安達と上野さんに挟まれていたのだが、その席が両方とも空席になっていた。

「二人とも既に出発してしまいました。お別れの挨拶ができずに残念だ、とのことでした」

為男はぽかん、と大口を開けてしまった。ついさっきの昼休み前の授業では、二人とも当たり前のような顔で席に座っていたではないか。

「入れ替わりに二人の転校生がクラスの仲間になります。二人とも入ってきなさい」

促されて入ってきた二人を見て、為男の困惑は完全な飽和状態に達した。その転校生の二人は、まるで双子のように安達と上野さんにそっくりだったからだ。

「新しい仲間の、朝倉くんと上田さんだ。みんな、仲良くしてやってくれ」

朝倉は安達の眉を太くして、目を細くしたようにしか見えない。一方の上田さんは、上野さんがメガネをかけたようにしか見えな

い。

——これ、当の本人じゃないの？ 冗談か、もしくはドッキリ？ クラスの他の生徒たちは当たり前のようにその二人を受け容れてしまい、いつものように授業が始まってしまった。独り為男だけが、こめかみを痛そうに押さえたままで。

確かに安達と上野さんは、冷子がいうところの『台本』を持たない『雑魚キャラ』だったのかもしれない。ただ、それにしたっていきなり転校は無いだろう。

転校した生徒は、どこに行ったのか。

転校してきた生徒は、どこから来たのか。

為男の内に、極めて不快な推測が湧き上がってきた。『雑魚キャラ』と呼ばれている彼らの役割は何なのか。『勇者』、『魔王』ときて、そして『雑魚』となればまさか……。

最悪の想像を頭から振りはらおう、と懸命に頭を振ったが、為男の心からそれは消えなかった。吹き出る汗が止まらない。

隣の席に座っている女子生徒が、為男を心配そうに見ている。

「どうしたの？ 気分悪いの？」

小声で問われ、少年は同じような小さな声で答えた。

「大丈夫。何でもないよ、木村さん」

三回目の、同じ台詞。

既に汗びっしよりの為男に、今度は担任教師が訊いた。

「おい、一戸。一戸為男」

よろめきながら、為男は返事をして立ち上がった。

「はい、何でしょうか先生」

教師が、ちょっと嫌な感じの笑みを浮かべながら言う。

「問四の答えは？」

為男は黒板を見ないまま、計算もしないで答えた。

「……四百三十七です」

「なんだ、聞いてたのか。てっきり目を開けたまま寝てたのか、と思っただよ」

教室のあちこちから笑い声が聞こえて、為男は顔面蒼白で椅子に座った。

『台本』を持たない『雑魚』キャラは、ロボット。或いはコンピュータ。

同じ台詞、同じ態度。異なるのは、言うタイミングだけ。おそらくは、為男の様子に合わせて台詞を言うタイミングが決定されている、に違いない。

今、せつせと授業をしている教師にしても、リピート再生を繰り返す音楽プレーヤーのように、同じ説明をしているだけなのだ。

不意に、はっ！ と気付いた為男は、慌てて教室の時計を見た。

既に時間は六時間目の授業の終了五分前となっている。為男はいつ五時間目の授業が終わり、いつ六時間目の授業が始まったのかも気付かなかった。

——いくらなんでも、これはおかしい。納得がいかないよ！

為男には、この『台本』を書いた作者の意図は分からない。とはいえ、高校を舞台として選んだ以上、何らかの重大な理由があるはずなのだ。授業は学校生活のいわば一番大事な項目だし、クラスメートたちだって人間関係の勉強のためには大切な存在のはずだ。

それらが、こんなぞんざいな扱いでいいのだろうか。こんな授業しか無く、あんなクラスメートしか居ないのなら、舞台は学校でなくともいいはずである。『魔王』だの『勇者』だの『四天王』だの。こんな連中がうようよ出てくるなら、それらしい中世ヨーロッパの世界でも舞台にすればいいはずなのだ。それが、なぜ……？

為男の心中で疑問の超大型台風が暴れまわっている間に、六時間目の授業は、さくつと終わってしまった。授業終了の鐘が鳴り、教室の中が騒がしくなる。

水浸しの床の上を歩くような足取りで廊下に出た為男に、一人の男子生徒が声を掛けた。

「一戸、もう帰るのか？」

「……あ、えっと」

「……………」

「……………」

奇妙な沈黙。爽やかな笑顔のまま硬直している加藤を見て、仕方なく為男は続けた。

「……ああ、うん。ぼくは帰宅部だからね」

「お前もいい加減に部活に入ればいいのに」

「いいよ。加藤みたいに運動神経よくないから」

「そうか、じゃあこれから部活だから。また明日な」

「さよな、ら……」

あきらめに近い感情に支配されながら、為男はぎこちない笑顔で応じた。

昨日の夕方に会った、一直線に進む一年生の女の子と同じなのだ。こちらが話を合わせてあげないと、いつまでも為男にまとりついてくるのだろう。

第四章 転校生は唐突に――（４）

為男は廊下をゆるゆると歩きながら、周囲を観察した。注意すると分かる。みんな一定の間隔で、同じ行動パターンを繰り返しているのだ。

放課後の学校が一見騒がしく感じるのも、多くの生徒が同時進行で行動しているだけで、同じ動作と同じ台詞を繰り返していることに、変わりはないのだろう。

――出来損ないの世界。でたらめな世界。

こんなところに居ると頭がおかしくなってしまうそう……

「キヤッホウ！ ご主人、はっけーん！」

元気一杯の声が、したたかに為男の脳を揺さぶる。逆井落子が満面に笑みをたたえて、びしっ！ と為男に人差し指を突きつけていた。

落子は懸命にこちらに走ってきて、段差も無いのに転びそうになり、そして今回は見事に転んだ。ぶべっ！ と顔から廊下の床にダイブした落子を見て、為男は慌てて駆け寄る。

おでこをさすりながら、にへへ、と笑った落子を抱えて立ち上がらせて、

「もう、良くなったのか？」と、心配そうな声を出した為男に、

「はい、美優ちゃんが授業休んで看病してくれたです」と、落子が元気よく応じた。

「そう、か……」

深いため息と共に為男は安堵した。落子が回復したこともそうだが、普通にバリエーションにとんだ会話を交わせること自体にも安心していたのだ。

落子は、少し元気の無い主人の顔色を上目遣いでうかがっていたが、

「お昼は屋上でお恥ずかしいところを見せてしまい、ごめんなさい

です」

と、ぺこり、と頭を下げた。為男もちょっと頭を下げて、

「いや、ぼくも怒って悪かったよ」

と謝ると、あごに手を当てて思い出してから訊いた。

「ドジ子は、あの、美優とかいう女の子と仲がいいのか？」

「ふえ？ あのう……そのう……やっぱり、いけませんですか？」

ちよっと泣きそうになっている落子の顔を見て、為男の方が驚いてしまった。

「いけない、って、何が？」

「ご主人の下僕たるわたしが、敵である『僧侶』の子と、仲良くしたりするのは」

「いや、いけない、ってことは無いさ」

為男はそう言って苦笑した。立場上下僕であるとはいえ、そこまですぐで気を遣わなくていいだろう、と思ったからだ。

「でも、あの子と、なんか友達になるきっかけでもあったのか？」

「それは、ご主人もお分かりになっている、と思うです」

落子は、澄み切った視線を為男に向けてきた。

「他の子たちは、同じ台詞しか言わないですから」

為男の顔は苦笑したまま凍りついた。辛うじて声を絞り出す。

「一年生も、その、やっぱりそうなのか」

「三年生も、先生も、みんなそうです」

「冷子が言っていたように、『台本』を持っていないからだな」

「ご名答です」

為男は額の汗を拭いた。予想通りの結論とはいえ、納得のできるものではない。

「あの、美優ちゃんと仲良くしてもいいですか？」

目をうるうるさせながらお願いしてきた下僕の頭を、為男はぽむぽむ、と撫でた。

「ああ、いいよ。でも、本当に大丈夫なんだよな？ さっき美優は、ドジ子に危害を加えられない、って言ってたけど」

と、為男は確認のため軽い気持ちで口にしたのだが、

「え、そんなこと言ってたですか？」と、落子はあたふたした。

「デマ情報なのか？」と、心配そうに為男が訊いたが、

「その、わたしの口からは何ともうー」と、落子は牛のように答えた。

——ああ、『台本』に書いてあることだから言えないんだ。

と、為男はそこで納得してしまう。

『台本』、『台本』、『台本』か！

「なあ、ドジ子」と、為男は口調を改めた。「ぼくは『台本』持っていないんだよ。だから、さっきの強制イベントも知らなかったし、それでドジ子がケガをしない、っていうことも知らないんだ。だから、当たり前、みたいな顔でふるまわないでくれよ、な？」

落子は俯いて、両手の人差し指をつんつんとつき合わせると、
「ご主人のおっしゃること、わかりますです。でも、わたしたちは『台本』通り振るまわないといけません。それに、さっきの強制イベントみたいに、結局お話は『台本』通りに進みますですからです」

と、申しわけ無さそうにゴメンナサイをした。

「そう、か。仕方ないなあ」

——『台本』で決まっているから。

授業やクラスメートがでたらめなのは、『台本』で決まっているから。

『魔王』や『四天王』や『勇者』が居るのも、『台本』で決まっているから。

『魔王』と『勇者』がお互いに命を狙うのも、『台本』で決まっているから。

みんな『台本』で決まっているから。

『台本』だから。『台本』だから。『台本』だから。

——だから、仕方ないんだ。

一戸為男は、それで納得してしまう自分が、腹立たしいというよりも情けなかった。

『台本』を持たない為男も、いつの間にかこの世界に適応してしまっただろうか？

あまり学校に長居したくない為男は、落子を連れて帰宅の途に付いた。

本当は冷子とも一緒に帰ったほうがいいかな、と思っていたのだが、

「初日を思い出していただければいいのですが、下僕は先に帰ってご主人を待つことになってますですす」

と、落子に解説されて、二人で肩を並べて帰ることにした。

悄然として家に帰った為男は、先に帰宅して待っていた冷子をひと目見て、その様子がおかしいのに気付いた。

朝と雰囲気が違う。何が？ とか訊かれても困るが、異様な感じだ。何か、一皮剥けたような感じがするのだ。大人になったような感じがする、といってもいいかもしれない。

何と声を掛けるべきか迷っている為男に、冷子が容赦の無い口調で言った。

「あたし、レベル上げをしてきたから」

「は？」

戸惑う為男は助けを求めて落子を見たが、驚いたことに落子の顔は青ざめていた。冷子に促されるままに『能力』を使った為男は、冷子の『レベル』が11になっているのを理解した。何ともいえない不吉な感じを覚えつつ、

「どうやってレベルを上げたんだ？」

と、こわばった声で為男が訊くと、

「そんなの、『雑魚』を倒して経験値を稼いだ、に決まってるじゃない」

と、眉一本動かさずに冷子が言っただけ。

「ぞ、雑魚？」

心臓がマシンガンのように打ち鳴らされるのを感じながら、為男は冷子に続きを促す。

「自分より上の学年を倒すと、経験値がいっぱい入るのよね」

まるで頭上に爆弾でも落とされたかのように、為男の全身に衝撃が走った。

「ま、まさか……ぼくと同じクラスの安達と上野を……」

「確かそう。そんな名前だったわね。『あ』と『う』で始まる二人を倒したはずだから」

「ふ、ふざけるな！ お前のやったことは人殺しだぞ！」

為男の怒声と同時に、冷子はその場にひざまずく。

後ろから、土下座した落子のカチカチと歯の震える音が聞こえて、為男は全身をうねりのように駆け巡る激情を、懸命にこらえようと努めた。

——くそっ、くそっ、くそっ！ こんな話を聞いても、怒るなっというのかよ！

昼休みに美優に言われたことを思い出す。

『闘気にあてられたのなら、為男から離れたほうが早く治る』

たしか、そう言っていたはずだ。為男は距離をとるべく、リビングの中で最もふたりから離れている位置にある壁に背中をあずけると、ゆっくりと深呼吸を繰り返した。

——落ち着け。落ち着け、一戸為男。まずは話を聞いてからだ。

『闘気』を発している主人の為男が二人から離れたことで、下僕の冷子はなんとか青い顔のまま立ち上がった。

「どういふことなんだっ」

うわずりそうになる声を必死におさえて、為男は訊いた。

「どういふことって、言った通りのことよ」

「つまり、人間を殺した、っていうことなのか」

「そんな言い方やめてよ。ご主人さまだって分かってるはずよ？」

『雑魚キャラ』なんて、同じ台詞を繰り返すだけじゃない。あんなの人間だなんて、認められないわ！」

冷子は力の無い金切り声を張り上げている。

「これも……これも『台本』通り、だっていうのか」

「補充された生徒、顔も名前も似てたでしょ」

「そ、それがどうした」

「『雑魚キャラ』は、顔も名前もランダムな組み合わせの使い回しだからよっ」

「ぐっ……」

為男は昏倒しかけて、爪を立てて壁にしがみついた。その様子を見て駆け寄ろうとした落子を手でとどめると、冷子に視線を戻した。

「だからって、おかしいだろ？ そんなの」

「わかってる、んでしょ？」

開き直ったのか、青い顔のままの冷子は腕組みをして冷えた声を出した。

「わたしたち、悪の『魔王』の部下なのよ？ 相手は正義の『勇者』なのよ？」

冷子の視線が、氷の矢のように鋭く為男の胸に打ち込まれる。

「悪の一味がどうなるか、『台本』が無くたって予想はつくわよね？」

——この手の話では、悪の一味は全員、正義の味方によって……。

為男は歯を食いしばると頭を懸命に左右に振った。

「だからって、許されることじゃないだろう。雑魚ならいいとか、そういう問題じゃない」

「じゃあ、あたしたちに何もしないまま倒されるのを待て、っていうの？」

——倒される。つまり、殺される。

『魔王』が『勇者』を殺せ、と命じたように、向こうもこちらを

殺そう、と狙っている。

その強い殺意は、今日の昼休みの屋上で証明されたばかりだった。目をそむけていた過酷な未来を目の前に見せつけられ、為男の意識は朦朧とした。

「ご主人さまも、すぐに分かるわ」

そう吐き捨てて、冷子は二階へと消えた。

為男は両手でごしごしと顔をこすったが、ぬるぬるとした嫌な汗が顔全体に広がっただけ。うめき声と共に暗転しかけた為男の視界に、何かが飛びこんでくる。青い顔の丸顔の女の子。懸命に、今にも倒れそうな為男の体を支えている。

「ご主人……」

「ドジ子、か。いいから、ぼくから離れるんだ」

「もう、怒りの『闘気』は出ていませんです」

目を閉じたままその場にへたりこんだ為男の体を、落子が自分の体でそっと支えてくれた。制服越しに、落子のぬくもりが為男にしみこんでいく。落子がハンカチで為男の額の汗をぬぐってくれると、まるで回復魔法を使われたかのように、為男の内に吹き荒れる不快感がおさまっていった。

「もう、大丈夫だ」

と、笑った為男がぼむぼむ、と落子の頭を撫でると、落子がにぱ、と笑い返した。

三日目の、朝。

いつも通りに、揃って学校へと向かう。

けれども、三人の間には何とない陰悪な空気が流れていた。昨夕、あんな状況でも、冷子は『設定』通りに『夜のお誘い』をしてきたのだ。

断わった為男の声が、ひととき冷たかったのは仕方のないことだったろうけれど、冷子との関係がより悪化したのも、避けられなかったようである。

下駄箱で冷子と別れると、為男は無意識のうちに大きく息をついた。

そんな為男に、不意にひとりの男子生徒が近付いてきた。目つきの悪いメガネの生徒。為男には見覚えがあつて、たしか名前は……。

「おはよう、一戸さま。三枝謀です」

「あ、ああ。おはよう、三枝」

そうか、こいつも雑魚キャラじゃないから自由に会話ができるんだ、と為男はうなづく。

そんな為男に、三枝はさらりと爆弾を投げこんできた。

「四谷がやられたらしいですよ」

「……は？」

「随分と頭が悪いですねえ。やられた、っていうのは、殺された、ってことですよ」

平然としている三枝は、唾でも吐き捨てるかのような口調で言った。

「まあ、四谷は何の取り柄も無いキャラでしたからね。死んで当然ですよ」

『ご主人さまも、すぐに分かるわ』

昨日の冷子の台詞が、為男の頭の中をぐるぐると回り続けていた。

第五章 知らないほうがいいこと――（ 1 ）

四谷がやられたその日、昼休みに為男が屋上に行くと、そこには落子が待っていた。

お昼はここで一緒に食べよう、と伝えてあったのだ。

常に昼休みの屋上が小春日和、というのは『台本』で決められていることだろうけど、この居心地の良さだけは偽者ではない。

「じゃーん！ 今日はお茶がありますです」

落子は、びしっ！ と魔法瓶を持った右手を突き出した。さあさあ、どうぞどうぞ、と勧められるままに為男はカップを受け取り、お礼を言ってからのおつそりと口に運んだ。

——うわ！ なんなんだ、これ？

口じゅうにからみつくような渋さに身もだえしつつ、為男は訊いた。

「これ、何？ 何を煎じたの？」

「えっと、紅茶です。ダーズリンですす」

——紅茶って、煎れかたひとつでこんなに渋くできるものなんだ。と、為男は軽い感動すら覚えた。不思議なもので頭の中はすっきりしてきて、味はともかくとして、気つけ代わりにはいいかもしれない。

にへへ、と笑っている落子にぎこちない笑みを返して見せると、

為男は文字通り、口に渋いものを含んだような声を出した。

「……四谷のことは、聞いている？」

「四谷先輩が、あの、倒されてしまったことですか」

おどおどしながら応えた落子の顔に、驚きの色は無かった。

「『台本』通りなのか？」

答えること無くうつむいた落子を見て、為男は確信した。

「『台本』通りなのか……」

——でも、それにしたって納得がいかない。

と、為男は真剣に考えこんだ。

昨日の屋上での襲撃の時、『勇者』のレベルは16だった。

そして一昨日の旧校舎での『魔王』との接見の時、四谷のレベルは35だった。

この手の話で、正義の味方である『勇者』のレベルが上がっていく、のは予想できる。

それに、悪の一味である四谷のレベルがそう簡単に変化しない、のも予想できる。

ところが、わずか一日後に四谷は倒されているのだ。

今の『勇者』のレベルは、最低でも四谷と同じくらい、つまり35は無いといけない。とすると、一日ごとにレベルは20くらい上がる、と計算できる。幾らなんでも、レベルの上がりかたが早すぎるのではないだろうか。

思い切って、為男は落子に訊いた。

「『レベル』って、どの程度の拘束力なんだ？」

「ふえ？」

突拍子も無いことを聞かれた落子は、すつとんきょうな顔をしている。落子はなんだかんだで口が堅いので、為男は答えやすい質問をぶつけてみた。

「『レベル』の低いキャラが、『レベル』の高いキャラに勝てるのか？」

「えっと……そんなことは、ないですよ」

落子は慎重に答えを選んでいうようだ。下僕たる落子は主人たる為男に嘘は言わない。言えないことは押し黙る。だから、この言葉は嘘ではないだろう。

「三人の力を合わせれば、『レベル』の低いキャラでも高いキャラに勝てるのか？」

「えっと、それもないです。やられるほうが無抵抗なら、話は別ですけどです」

「……ふむ」

と、為男はうなつてみたが、四谷が無抵抗でいる理由は特に思いつかない。

つまり『勇者』のレベルが、四谷を上回っていた、ということになるようだ。その素晴らしいレベルの成長率にいささかならず不安を感じた為男は、曖昧な訊きかたをした。

「何とかならないのか？」

「はいです？」

「何とか勇者一行に対抗するすべはないのか？」

「と、言われましてもうー」

「冷子はレベル上げをしているよね。ぼくのレベルも上がるのかな？」

「あの、ご主人は無理ですす」

「もしかして、ぼくのレベルは固定？」

返事は無い。

それでも為男は納得した。一応自分は、いわゆる中ボスなのだ。この手の世界で、悪者の幹部クラスが強くなる、ということはまず有り得ない。レベルの上限がいくつなのかは知らないが、為男が強くなり続ければ『勇者』は追いつけなくなってしまうだろう。

もしかして、一度倒された後で強化手術をほどこされ、パワーアップして『勇者』の前に再登場、というのはあるかもしれないが、それは為男にとって楽しい未来予想図ではない。

「冷子は、レベル上げで強くなれる」と、為男は確認。

「そうですす」こくこく、と落子がうなづく。

「じゃあ、ドジ子も強くなれるんでしょ？」と、為男は質問。

「そうですす」再びこくこく。

「それなら、その……いや、でも……」と、為男は言いよどんで、「レベル上げを、しますですか？」と、澄み切った瞳で見つめられた。

心を読まれてしまった為男は返答に窮した。冷子がやってみせた

通り、レベル上げというのは『雑魚』を倒して、いや、ひとを殺して経験値を稼ぐことなのだ。そんなもの、主人である為男からしてもじゃないが勧められない。『雑魚』とはいえ、モンスターなどではないのだ。少なくとも外見はれっきとした人間である。

ところがどっこい、為男はここであることに気づいた。

「『勇者』たちは、どうやってレベル上げをしているの？ まさか、同じように雑魚キャラを、その、人間を、何というか、アレしてるの？」

「正義の味方なので、倒してはいけません。代わりに、悪い人を折檻してますです」

「せっかん、ねえ」

「あとは、特訓ですす」

「……は？」

「ええと、筋トレとか、走りこみとかで特訓すれば、レベルは上がりますです」

為男の口が、ぽかん、と大きく開いた。

「ごしゅじーん、大丈夫ですかあー？」

落子が顔の前で小さな両手を振ってみせたので、青い空の彼方に行きかけた為男の意識は、なんとか屋上へと帰ってくる事ができた。

——特訓、っていうのも奇妙だけど、それ以上に内容のほうがかしい。

「あのさ、剣の稽古とか、魔法の勉強、とかではないの？ 三人のうち、二人は魔法使いなんでしょ？ 筋トレは魔法と無関係じゃないのかなあ」

「三人のうち、三人ですす」

「……な、何が？」

「魔法使いです。『勇者』は万能なので、剣も魔法も使えますです」「うーん、ちょっと魔法にかたよりすぎじゃないのかなあ」

「それは、『勇者』がメインで残る二人はサポートキャラですから

です。ある意味、ご主人とわたしたちの関係と同じです。こっちも三人ですからです」

「こっちって……落子と冷子は魔法が使えるから、もしかして、ぼくも?」

「です。とっても強い最強魔法、『暗黒の闇』が使えます」
「そ……そうなんだ。とにかく、『勇者』ご一行は人殺しをしなくてもいいわけだな」

「そうらしいです。らしいです、っていうのは、その、わたしの『台本』には書いてなくて、あの、美優ちゃんがこっそり教えてくれたです」

「なるほどなあ。で、ドジ子は?」

落子の丸くて大きな目を覗き込んで、為男は訊いた。

「ドジ子は、特訓でレベルは上がるの?」

「で、できますですけど……」

この時、ドジ子の顔になんともいいような無い表情が浮かんだのだけれど、為男はそれを読み取ることができなかった。

表裏があまりないドジ子にしては、それはそれは珍しくえらい複雑な表情で、為男は強い不審を覚えつつも、ドジ子なのでまあいいか、と思い、話を続けてしまった。

「イヤ、かな」

「イヤじゃ……ないですけど」

「じゃあ、特訓してくれ。何もしないよりはマシだし、かといって雑魚キャラに手を出されるのも困るから。そうだな、せめてぼくの十分の一くらいにはなって欲しいなあ」

主人の命を受けて、決心した落子が小さくうなずいた瞬間、屋上の扉が乱暴に開かれた。

第五章 知らないほうがいいこと――（ 2 ）

まるで南国の島に撮影会に行ったグラビアアイドルのように、見事なプロポーションを太陽の下に見せつけるようにしてその場に登場したのは、色部冷子だった。

何か為男が言うより早く、冷子が宣言する。

「今からここで、『奥儀』の練習をするから」

「『奥儀』って、何？ それになんで屋上をするの？」とは、為男は訊かなかった。たぶん冷子が嫌そうな顔で仕方なくここに来たところをみると、これはおそらく……

「……強制イベントよ」

「そう、か」

どうやら、昼休みは強制イベントの時間らしい。これで三日連続だ。

さて、明らかにやる気の無い冷子が事務的に話すところによると、『奥儀』は三種類あるとのことだった。

ひとつは『大攻撃』。

ふたつめは『大回復』。

みつつめは『倍力魔法』。

一方的に説明を終えると、急に冷子は制服を脱ぎ始めた。慌てて目を隠した為男の手の隙間から見えたのは、制服の下に着込んでいた体操服。

『一の二 色部 冷子』

と、きれいな字で書かれた、大きな名札が白いシャツに付いている。

振り返ると、落子もいそいそと制服を脱いでいた。こちらも下に体操服を着込んでいて、

『一の一 逆井 落子』

と、こちらは丸っこい字で書かれた名札が見える。どうやら、名札はそれぞれ自分で書いたらしい。

怪訝そうな顔をした為男に、下僕が恭しさとは対極にある口調で説明。

「わかるでしょ？ お色気イベントなのよ、これ。視聴者サービス、っていうの？」

「ああ、そう」と、適当に為男はうなずくと「下にはいてるの、それ何？」と、訊いた。

「ブルマよ」

「ブルマって、何？」

「一昔前の、女子用の体操服だったみたいね。まあ、『台本』を書いている人が結構な年配のひとなんじゃないかしら」

ふうん、と惰性でうなずいた為男は、もう一度二人の下僕の姿を確認した。

体操服のサイズは、二人ともピッタリ。そのため落子にはちよつと気の毒なことだが、二人のプロポーションの差がこの上なくあからさまになってしまっている。

冷子がくふふつ、と笑った。

「へえ、いい目つきね。嬉しいじゃない、一応は興味あるんだ」

「し、仕方ないだろ、そんなの。それでも男なんだからな」

「ちなみに、衣装はスクール水着も選べるんだけど、どう？」

「い……いや、そのままでもいいよ」

あらあら残念ね、と口では言いつつも、どこか気の進まない冷子に対して、なぜか落子はハチマキまで捲いてやる気満々である。

いつもと違う二人を興味深々で見ていた為男の目の前で、突如として冷子が歌い始めた。

「愛するご主人さまの〜♪」

呆然としている為男の目の前で、今度は落子が熱唱。

「敵をやっつける〜ため〜♪」

——これ、なんなんだ？

「ぶつとばせ〜♪ 大攻撃〜♪」

最後は二人で同時にハモっている。流石に為男が口を挟もうとした瞬間、二人の手から同時に白い閃光が伸びた。

そして轟音。

為男の顔の左半分が、光を浴びて白く輝く。

恐る恐る顔を左に向けた為男は、反射的に叫んだ。

「おいおいおい！ あそこの屋上のフェンスが綺麗にふつとんでるじゃないか！」

「そりゃ、『大攻撃』だからよ」

「あれ、どうするんだよ！ それに壊れたフェンスは下に落ちていったぞ！ 下に人が居たらどうするんだ！」

「壊れた部分は用務員のおじさんがオートで直してくれるわ。それに強制イベントなんだから、下にはどうせ誰も居ないわよ」

——そういう問題か？

と、呆然としたままの為男をよそに、冷子は、

「じゃ、次は『大回復』ね」

と、つまらなさそうに言った。

「また、歌うのか」

「まあ、そういうイベントだから」

肩をすくめた冷子は、軽やかにステップを踏み始めた。どうやら今度は踊りがついていっているらしい。落子も、冷子に合わせようと懸命に踊り始めたが、こちらは転ばないようにするのが精一杯、といった感じである。

——これのどこがお色気イベントなんだろう……。

と、二人に見えないところでがっかりした為男の目に、あるものが飛び込んできた。

ぶるるん、ぶるるん、ぶるるるん。

——そういうことか！

と、為男はノーベル賞級の大発見をした科学者のように、膝を強く大きく叩いた。

体操服越しに、左に右に上に下に、冷子のある部分が揺れるわ揺れるわ。流石に為男も目のやり場に困って、視線をあらぬ方向に動かすと……。

ぺったん、ぺったん、ぺったんたん。

冷子よりも一生懸命に踊っている落子が可哀想だ、と為男は少し切ない気持ちになった。

「みんながんばれ♪」ぶるんぶるん。

「わたしもがんばる♪」ぺったんぺったん。

「痛い痛い飛んでけ♪ 大回復♪」ぶるんぺたんぶるんぺたん。

直後に二人を中心にして白い光が球状に広がっていく。思わず身構えてしまった為男の目の前で、唐突にその光は消えた。

「今度は、どうなった？」と、訊いた主人に、

「ドジ子、ご主人さまに手を見せてあげて」と、ぶるんが答えた。ひよいと出されたのは、ぺったんの小さな手。別に、どこもおかしいところは無い。

為男の不審な視線を受けて、落子が絆創膏を剥がしてみせた。

「あ！ 包丁の切り傷と火傷の跡が無くなってる！」

「『大回復』だから、三人の体力を同時に回復するのよね」

「……それだけ？」

「そう、それだけ」

——なんだかなあ。

と、為男は拍子抜けしてしまった。まあ、いいものを見せてもらったので、これで十分といえば十分かもしれないけど。

「で、次は？」と、いまさらのように期待の声を上げた為男に、

「『倍力魔法』よ。あたしのレベルと、ドジ子のレベルを掛け合わせた魔法を使うことができるの。ただし、二人ともレベル34以下の場合、という条件がつくわ」と、冷子が解説。

「レベルさんじゅうよん？」

「たぶん、四天王は使えないための『設定』だと思うけど」

ほほう、と為男は大きく頷いた。

四天王の最弱、四谷並夫はレベル35だった。34以下のみ、というのはそのためなのだろう。

さて、『倍力魔法』である。言葉通りに受け取れば、冷子はレベル11で落子はレベル10だから、レベル110の魔法を使うことができる、ということになる。コレは面白いな、と為男は思った。二人のレベル次第では、結構効果的に使えそうだったからだ。四天王が使えないようになってるのは、『魔王』に逆らわないようにするためかもしれない。もともと『台本』で決まっていることなのだから、理由などはどうでもよいだろう。

少し余裕の出ってきた為男は、落ち着いてふたりを観察することができた。

気づいたことは、ふたつ。

ひとつ目。冷子の歌声は、まるでオペラ歌手のように見事だということ。それに対して、落子は小学校の合唱部、といった風情。

ふたつ目。意外なことに、落子と冷子のお尻の大きさはそれほど変わらない。冷子はともかくとして、落子はお尻だけが大きいのでちよつとドンくさく見える。でも、ドジ子らしいといえばそうかもしれない。

さつきからふたりが気をつけ、の姿勢のまま立っているの、今度は踊らないみたいだ、と為男はちよつと残念に思ったのだけれど、それもつかの間のことだった。

「冷ちゃん、失礼しますです」

と、言った落子が冷子の背後に回ったかと思うと、やおら腕を伸ばして冷子の胸をわしづかみにしたのだ。

本能のおもむくままに雄たけびを上げそうになった為男は、慌てて必死に口を押さえた。

「ふたりの鼓動をあわせて〜♪」（冷子）ぶるぶる。

「ふたりの呼吸を合わせて〜♪」（落子）むにむに。

「信じる二人は〜♪ ばいりよく〜まほおおう♪」（二人同時）ぶるむにぶるむに。

一際こぶしを利かせて二人が歌い終わった直後、為男の視界が一瞬だけ金色に輝いた。そして、またもや轟音。

考える間も無く為男の体は真後ろに吹き飛ばされ、フェンスに後頭部をしたたかにぶつけてしまった。

二人の女の子はどうかというと、座り込んで揃って咳きこんでいる。

「ちょっと、『台本』には失敗して爆発、って書いてあったけど、本当に爆発すること無いじゃない！」

冷子が怒ったのは誰に対してなのかは分からない。

ただ、見事に失敗した二人を見ても、別に為男は、驚きはしなかった。むしろ心に湧き上がった感情は、『納得』だった。こんな都合のいいお色気イベントで、悪者がパワーアップなどするはずが無いのだ。

為男の中に、ふつつつ、と疑惑の種が芽吹いた。

これをどこかで見ている人たちは、純粹にふたりのお色気を楽しんでるのだろうか？

もしくは、主人思いの女の子ふたりの失敗を見て、ほほえましく思っているのだろうか？

あるいは、悪者が失敗したことで、正義は勝つ、と思って喜んで

いるのだろうか？

それでも自分の中に、わずかな失望が湧き上がってくるのを感じ、為男は不機嫌になった。

不機嫌になったのは、失敗したふたりに失望したから？ それとも、まだ頑張れば何とかなるかもしれない、との甘い期待を抱いていた、自分自身に失望したから？

「……ご苦労だった、な」

為男はふたりの下僕に、ため息混じりのいたわりの言葉をかけた。

制服を着なおして、あっさりと背を向けた冷子を、為男は思い切って呼び止めた。

「冷子、続けるつもりなのか？」

「何を？」

「レベル上げ、さ」

「当然でしょ？ それに、ご主人さまのためにもなることなのよ」眉をへの字に曲げた為男を見て、冷子が続けた。

「ご主人さまにはね、もうひとつ特殊能力があるの」

落子が、水と間違えて酢を飲んでしまったような顔になった。

「あの、言っちゃうつもりですか？」

「だって、もし『台本』を持っていれば、そこに書いてあるでしょ？ 本来、知っているべきご主人さま本人の能力を話すだけなら、問題無いわ」

落子の返事を待たずして冷子は主人の方に向き直った。

「あのね、何のために下僕が二人もいる、と思っているの？」

「僕のサポートのためじゃないの？」

「それもあるけどね、ご主人さまは一時的にわたしたちの能力を吸収できるのよ」

胡散臭そうな顔をした為男に、冷子は淡々と続ける。

「つまり、レベルを吸えるの。今のあたしのレベルは11だから、例えばそのうち10を吸えば、ご主人さまは一時的にレベル409

に、あたしはレベル1になるの」

ちらっと落子を見てから、為男は反論した。

「本当にそんなことができるのか？」

「一時的にね。戦闘シーンの一ターンだけ、そういう行為が出来るの。次のターンには元に戻ってしまうけど」

「ぼくのレベルは、固定じゃなかったの？」

「だから一ターンだけよ」

「もっと詳しく、話してくれよ」

「わたしに分かるわけ無いでしょ！」

この時の冷子の口調はいまだかつて無いほど冷たく、そして厳しいものだった。

——言えない、っていうのは分かるけど、分からない、っていうのはどういうことだ。

為男の中にごく自然な疑問、というよりも不審が浮かんだが、冷子がさっさといなくなってしまったことで、訊きそびれてしまった。仕方が無いので思考を切り替えた為男は、もぞもぞと制服を着なおしている落子を横目に見つつ、今の冷子の言葉の意味を考え直した。

さっきの落子の話では、レベルが高い方が必ず勝つ、とのことだった。

そして、冷子の話では為男はレベルの上限を上げることができる、とのこと。

すなわち、二人のレベルが上がれば『勇者』に対抗できることになる。二人が頑張れば、レベル999も目ではない。

——もしかして、魔王を上回ることが、できるのか？

為男の内に、不意にまばゆい何かが浮かび上がってきた。

——『勇者』を殺せ、などというふざけた命令を、無視すること
もできるのか？

冷子と落子がそれぞれレベル300になれば、それらを吸って、
為男はレベル999になれる。二人のレベルがもっと上がれば『魔

王』すら追い抜くことができるかもしれない。それでも一ターンの間に魔王を倒せるだろうか？　もし、失敗すれば……。

——早まるな。落ち着け、一戸為男。

と、為男は両手で顔を叩いた。

その考えでは、経験値を稼ぐために、冷子と落子に何百人という『雑魚』の生徒たちを殺せ、といっているようなもの。そんなことはできないし、やったとしても魔王を倒せる確証はない。それに『台本』に逆らうようなそんな行為を、二人は認めないだろう。

まずは『勇者』のことだ。『勇者』たちは為男を殺そうとしている。少なくとも『魔王』は為男を殺そうなどは、今のところはしていない。

対策を考えるとすれば、『勇者』に対して、を優先する必要がある。

——もう一度、落ち着いて確認しよう。

昨日、勇者はレベル16だった。ただ、レベル35の四谷が倒された以上、すでに最低でもレベル36になっているはず。すると、一日ごとにレベルは20くらい上がる、と計算できることになる。

三枝はレベル75なのだから、75マイナス36イコール39である。

つまり、二日あれば三枝が倒されるはず、なのだ。

同じように考えれば、二見はレベル150だったのだから、150マイナス36イコール114である。

すなわち、六日で二見は倒される、ことになるだろう。

そして一戸為男はレベル399だから、399マイナス36は363だ。これを20で割ると、うーん、めんどくさい。だいたい三週間近く為男の身は安全だ、と計算できる。

三週間しかない、と考えることもできるし、三週間もある、と考えることもできそうだ。

そう考えて、為男はすっかり冷静さを取り戻すことができた。少なくとも最も危険と思われる『勇者』に対してはある程度の時間が

ある。その間に、今の特殊能力のように自分が知らない情報が新たに手に入ってくるかもしれないし、二人の下僕のレベルが上がることで、状況になんらかの変化が訪れるかもしれないのだ。

第五章 知らないほうがいいこと (3)

——真剣に、未来のことを考えてみようかな。

と、思い始めた為男は、その日の放課後、決心して悪の同士の姿を探した。

四谷がやられた件に対して、どう思っているのか聞いておこう、と思ったからだ。

冷子の話を聞いたことで、『勇者』との戦いに少々前向きになった、といってもいいのかもしれない。

六時間目終了のチャイムと同時に、為男は二年生の教室を順番に端から覗き込んでいく。三番目の教室で、まずは目つきの悪い眼鏡の男子生徒を発見した。

「なあ三枝、ちょっといいか？」

「なんでしよう、一戸さま」

「何か、対策とかしてる？ その、『勇者』に」

「まあ、精神を痛めつけるのがやっぱり一番ですね。それに、その方法は一戸さまのほうがお詳しいのでは？」

口調とは裏腹に、人を見下したような嫌な光がメガネの奥にちらついていた。

幾ら情報収集のためとはいっても、こんな奴とは長い時間話をしたくない。

為男はその場を足早に離れると、今度は背の高い生徒を捕まえた。正確にいうと、捕まえた、というよりも捕まえられてしまった。

探す必要なんて無かったのだ。為男が二見の視界に入った瞬間、耳をつんざくような大声がかけられた。

「オッス！ 一戸さま、お疲れさまッス！」

為男はキンキンと痛む耳を押さえた。周囲の生徒たちが無反応なのがまた嫌な感じだ。それでも懸命に気を取り直して、

「二見は、『勇者』対策を何かしてる？」と、探りを入れた為男に、

「オッス！ 勿論筋トレっス！」と、二見は力の限りに応えた。
『筋トレ』と言う単語に、嫌でも為男は反応せざるを得ない。

「き、筋トレすると、二見のレベルは上がるのか？」

「いえ、上がりませんっス！」

「……じゃあ、何で？」

「趣味っス！ 男なら、いや漢なら、筋トレは当然のことっス！」

漢は筋肉がすべてっス！ 脱ぎますか？ 見ますか？」

「い、いや、いいよ」

止めたにも拘らず、二見は上着を脱ぎ始めた。

「脱ぐんでスね？ 見るんでスね？」

逃げるようにしてその場を離れた為男が、階段の手前で振り返った時。

ロボットのよう動く生徒たちが行きかう廊下の中央に、ふんどし一枚の『漢』が居た。

げんなりとして家に帰った為男を出迎えたのは、奇妙な効果音。

チャラチャッチャッチャー♪

「ご主人！ レベルが上がったですう〜」

体操着姿の落子が、汗だくでふらふらしながら現われた。為男が『能力』で確認するとレベルは11になっている。

「大丈夫か？ どの程度、筋トレをがんばったんだ？」

「うう、うう、腕立て十回を十セットお、ですう〜」

為男は素直に驚いてしまった。落子のように細身の女の子にとつて、腕立て伏せ合計百回、というのは大変な重労働のはずだ。

「よくやった。休んでいいぞ」

ハチマキが巻かれた下僕の頭をぼむぼむ撫でると、落子にはぽぽと笑ってみせたが、すぐにまたふうふう言いながら目を回し始めた。ちよっと申しわけ無い気持ちになった為男は、落子の頑張りを見て、ごほうびと気分転換に少し遊んでもいいかな、と思いつく。

ただ、遊ぶにしてもそんな場所があるのだろうか。よく考えれば、

家に普通は必ずあるはずのテレビが無い。そして、ありふれたはずの携帯電話も無い。この分では、家庭用ゲーム機、カラオケ、漫画喫茶、ゲームセンターの類も無いと思ったほうがよさそうだ。

「休みの日は、どうしたらいいんだろう？」

半分独り言のように呟いた為男に返されたのは、嫌な感じの冷子の笑みだった。

「いっておくけど、休みなんか無いわよ」

「へ？　なんで？」

「毎日が同じ曜日なのよ。同じ授業だし、同じ展開だわ。世界の命運を決める『勇者』と『魔王』の戦いに、休みなんかあるわけ無いでしょ？　朝と昼と夜があるだけでも、まだマシだと思うけど」

「……だとしても、自由な時間はあるわけだし、何か遊ぶものは無いのか？」

「決まってるでしょ？」

そう言うのと、冷子は制服越しに自分の豊かな双丘を指さしてみせた。

「おいおいおい」

「だってそういう『設定』よ。だからこの家には時間を潰せるようなものが何も無いわ」

ひどい話だ、と為男は顔全体をしかめた。

「……もしかして、『勇者』たち主人公サイドには、テレビとかあるのかな」

「無いらしい、です。彼らこそ、自由な時間は無いです。放課後は、夜遅くまで町を徘徊して、悪者を探して折檻しているらしいです」

汗をふきふき、制服に着替えた落子が答えた。

「しかも、探すのは常にジョギングしながららしいです」

「ああ、走り込みの『特訓』を兼ねているのか」

改めてひどい話だ、と苦り切った為男に、再び冷子が説明してくれた。

「まあ、それでもイベントは豊富らしいけど」

「イベント？」

「そう、強制ではない、おまけのイベント。捨て犬を拾って家に連れ帰ったりとか、迷子の女の子を母親のところまで連れて行くとか、大きな荷物を背負ったお婆さんを助けてあげたりとか」

「……なんだか、なあ」

「そういう善行を積むことでも経験値が稼げるらしいわね。その他にも、学校の中で数々のイベントがあるらしいわよ。学校の図書館で強力な魔道書を探すとか、旧校舎の地下室で伝説の武器を探すとか、校長室に隠されたレアなアイテムを探すとか」

「随分と、詳しいな」

「佐治さんから聞いたわ」

「佐治？ ああ、『僧侶』の子か。落子と同じように、冷子も仲がいいとは意外だな」

「向こうが勝手に話しかけてくるだけよ」

「どこまでも冷たい女だ、と為男はあきれたが、直後にものすごく嫌なことに気づいた。」

「『勇者』たちは、学校の中でたくさんイベントがあるのか？」

「らしいわね」

「じゃ、ぼくたちは？」

と、為男は下僕の顔を等分にながめたが、二人とも酸っぱそうな顔をしたまま答えないのを見て、自分で正解を発見してしまった。

「まさかぼくたちは、『勇者』たちが校内のイベントを消化する間、ずっと何も無いままに同じ授業を受け続けることになる、のか？」

「……まあ、悪者サイドだしね。だから、別に授業なんて受けなくてもいいのよ。校内で繰り返される規定の会話さえこなしておけば、授業なんかばっくれても問題無いわ」

納得。

この上なく、納得。

つまり、学校が戦いの場選ばれたのは、勇者サイドのためだけ

なのだ。『勇者』たちに学校がらみのイベントを用意する目的で、

『台本』の作者は学校を舞台に選んだのだ。

だから、為男たち悪者サイドには何も無いし、授業もあんなぞんざいなものしか無い。

恐らく『勇者』たちにとっては、あの退屈な授業もイベントの一環で、国語の教科書には冒険のキーワードが入っていると、地理の地図帳にはアイテムの場所が隠されているとか、化学の教科書には融合魔法のヒントが記してあるとか、色々な仕掛けが用意されているのだろう。

――所詮、ぼくたちは『勇者』ご一行さまの、引き立て役のおまけに過ぎないんだ。

と、しょんぼりした後で、為男はゆっくりと頭を振った。

――いや、考え方を変えればいい。

ものの見方を変えれば、『勇者』たちはイベントをこなすのに精一杯、ともいえる。

文字通り、家は『宿屋』のように寝て体力と魔力を回復するためだけの場所になっているのかもしれない。少なくとも、為男の方が自由な時間は多いはず。そう考えれば、悪いことばかりではないだろう。

最後の日まで時間があるのだから、少しだけ好きに過ごしても大丈夫なはずだ。

とにかく、この世界に来てからは色々なことがありすぎた。落ちて着いて今までのことをちゃんと整理したい。知らないことはまだあるだろうし、時間も残されている。

もしかしたら『台本』のアラを探してその穴を突くことで、何かうまい逃げ道があるのかもしれないし。

――まだ、三週間近くもあるんだ。

為男は自分に何度も言い聞かせて、繰り返し独りで頷いた。

第五章 知らないほうがいいこと――（ 4 ）

だが、為男の安心も三日ともたなかった。

決心してから僅か二日。

三枝と二見の様子を見に行つて、代わりに佐々木と笛木という生徒になっているのを発見した時、為男の顔色はずざざざと音を立てて変わった。

――そんな莫迦な。三枝はまだしも、二見はレベルが三桁あったのに！

レベル151の二見が倒された以上、既に『勇者』のレベルは200に達していてもおかしくないことになる。

あつという間だ、と、為男の全身は震えた。三週間なんて必要ない。一週間ともたずに、為男も殺される。そしてよく似たそっくりさんの『い』で始まる生徒――伊藤だか石橋だか知らないが――と入れ替わるだけなのだ。第一、為男だって決まった時間に学校に行き、学校では決まった台詞しか言っていない。

――ぼくは、雑魚キャラと何が違う、というのだろう。

為男が今こうして、悩んだり恐れたりしていること。

それすらも、『台本』の筋書き通りではないのか。

未来を探して足掻いていることさえ、『台本』に書かれている内容なのではないのか。

――何をして、むだなのかな。

為男の心が、深い『暗黒の闇』に包まれた。

何もかもが莫迦莫迦しくて、為男は、あはははは、と笑った。

「キャッホウ！ ご主人、今日はそこそこうまうできましたです！」
その日の夕食に出されたのは、ぼろぼろになったハンバーグ。
どうすればこうなるのかは為男にも見当がつく。中まで火が通っているかどうか確認するために、ドジ子が何度も菜箸でつんつんと

つついたのだろう。

味の方は、まあまあだ。焦げていない、中まで火が通っている、それで上等だ。

為男が味を褒めたので、にへへ、と落子は笑っていたが、空になった為男の皿を見るとにぱぱ、と笑った。

為男の内にあっただもやもやしたものが、少しずつ薄らいでいく。

「今日は腹筋をがんばりますです！」

と、びしっ！ と敬礼した落子の頭を、為男はぼむぼむと撫でつつ、

——冷子は、レベルいくつになったのだろう。

と、他人事のようにぼんやりと考えた。

為男の心配をしてくれる隣の席の女子生徒は、木村さんから岸川さんに代わっていた。

その二日後。

夜中に為男の目が覚めた。

この世界に来てからは夢も見ないで熟睡できていたのだが、今日はどうも違うらしい。

理由はなんとなく分かっている。今までは慣れない世界と、『勇者』との邂逅とを恐れて緊張に満ちた日々を送っていたのだけれど、三枝と二見が倒されてしまっただけで、以来、昼間も緊張の糸が切れてしまったようなのだ。

一日中、ぼーっとしているような感じがする。心も体も疲れていないのだから、為男の眠りが浅くなるのは当然のことなのだろう。水を飲もう、と思っただけで一階に降りた為男は、リビングの電気がついていないのに気づいた。

たしか最後に居間に居たのは、背筋運動をしていた落子のはずである。

どうも、落子は真面目に筋トレに励んでいるらしい。でもそこはドジ子のこと、うっかりリビングの電気を消し忘れたようだ。

こんな状況でエコロジーも何も無いのだけれど、気付いた以上は電気を消すことにした。スイッチを押そうとして、何気なく為男の視界に映ったものがある。

床に落ちている、真っ白な本。

——ああ、ドジ子の『台本』だな。

あれほど大事なものだ、触るな、といったのに困ったもんだ、そう思った直後、

為男の顔中に汗が噴き出した。

——ただの白い本なのに、ぼくは何でドジ子のものだ、と分かったんだろう。

じわじわ為男の中に浮かび上がってきたもの。それは、二人の『台本』を初めて見た時の違和感。

同じ位の大きさ、同じ色、同じような質感。しかし、一箇所だけ違う点があったのだ。

違うものはひとつ。それは、厚さ。

明らかに、落子の『台本』の方が厚かった。

だから、為男は目の前に落ちている白いだけの本が、落子のものだ、と気づいたのだ。

——厚みの違いは、何を意味するのだろうか……。

『台本』を拾い上げた為男の手は震えた。

同じ下僕と言う役柄であるなら、『台本』の厚みはほぼ同じで構わないはず。

『勇者』に屋上で襲撃されたときのように、落子しか参加しない強制イベントも存在するから、多少の厚みの違いはあるかもしれない。ただ、厚さが一目見て分かるほど違う、というのは明らかにおかしい。

厚い、ということは、書いてある内容も多い、と考えるのが自然だ。

結論。落子の方が、出番が多い。

つまり、冷子の方が先に出番が終わり、転校してしまう。

——それだけでも、十分すぎるほど嫌な話だけれど……。

今までで一番強い不安に襲われた為男の手は震え、ついうつかり落子の『台本』を床に落としてしまった。かがんで拾い上げようとして、為男の全身が石のようになる。

『台本』が開いている。

おそらく何度も読み返したであろう、折り目のついた箇所が開かれていた。

——見てはいけない、見てはいけないんだ！

この時、為男の目は意思を裏切って動いた。ページの真ん中に太字で書かれていた一行の台詞が、まるで生き物のように為男の視神経に侵入してきたのだ。

落子「ご主人なんて、大嫌いです！」

為男の体と心がかくかくと震えた。『禁忌』、その四文字が脳裏をよぎる。

——ドジ子が、ぼくのことを大嫌いになる。

その事実。為男が最も望んでいなかった現実。それを目にした為男の中で、何かが切れた。

居間にある大きな鏡。

そこに映った化け物が、真っ白な本をむさぼり読んでいた。

☆ シーン49 ☆

【視聴覚室（放課後）】

○為男、冷子の屍体を発見する。

為男「よくも冷子をやってくれたな」

落子「冷ちゃん、かわいいそうです」

○為男、激怒して保健室へ向かう。落子、泣きながら後についていく。

【保健室（放課後）】

○保健室では美優が貧血で倒れて休んでいる。

○落子、手錠（イベントアイテム、ナンバー25）を取り出す。

○為男、美優を手錠で拘束して旧校舎へ拉致する。

【旧校舎の体育倉庫（放課後）】

○美優の友人である落子は戸惑いを隠せない。

落子「あの、どうするですか？」

為男「決まってるだろ。やられたから、やり返してやるのさ」

○落子、為男の命令のままに美優を天井から吊るす。

落子「準備ができました……」

為男「この世に生まれてきたことを後悔させてやるぜ」

美優「いや！ 助けて、勇くん！」

為男「ぐえへへへ、どうせ泣き叫んでもきこえないぜ！」

○為男、美優にひどいことをする。落子は必死に止めようとする。

落子「あんまりです、やめてあげてくださいです、ご主人」

為男「うるせえ！」

○為男、落子を殴る。昏倒した落子を放り出し、美優に繰り返すひどいことをする。

☆ シーン50 ☆

【旧校舎の体育倉庫（翌朝）】

○勇太と智則、体育倉庫に入る。

勇太「ああ、美優！　なんてことだ！」

為男「ぐえへへ、遅かったじゃないか」

智則「くそ、この人でなしめ！」

為男「お前らが悪いんだ。俺のかわいい冷子をよくもやってくれたな。仕方が無いから、この女に代わりになってもらっただけだ。ガキと思っていたが、結構楽しめたぜ」

智則「もっと早く、ここに気づいていれば……」

○身も心もぼろぼろの美優、死んだようにぐったりと動かない。

勇太「くそ、お前だけは、お前だけは許さない！」

○勇太、勇者として四度目の『覚醒』をする。

智則「くそ、だが美優は戦闘不能だ！　回復魔法を使える奴がないぞ！」

○落子、決然として立ち上がり、『勇者』の側につく。

落子「わたしが援護します！　一緒に戦います」

為男「下僕の分際で、何言ってるやがる！　下僕は下僕らしく、黙ってオレのことを聞いてりゃいいんだよ！」

落子「ご主人なんて、大嫌いです！」

○智則の所まで走り、為男に対して戦闘体制をとる落子。

智則「ありがとう、落子」

落子「伝法先輩、わたしなんかでいいですか？」

○大きく頷く智則。幸せそうに微笑む落子。

★ 戦闘シーン開始 ★

為男 VS 勇太・智則・落子　（最低でも『勇者』のレベルは25は必要）

○『覚醒』した能力で勇太は為男を撃破。

為男「くそ、お前らみたいなカスどもに！」

勇太「お前は最低のゲス野郎だ！」

智則「『魔王』の威を借る狐の分際で！」

落子「鬼です！ 悪魔です！ 変態です！」

○三人がかりで、為男の体はこなみじんにされる。

※ 以後、『魔王』とのファイナルバトルまでパーティはこの三人。

※ 心も体も深く傷ついた美優は、勇太たちの前から姿を消す。

（ファイナルバトル、ピンチの場面で美優は再登場する。その際のレベルはその時点の『勇者』と同じものとする）

第六章 わがままを少しだけ――（ 1 ）

――嘘だろ？

崩れ落ちるように力なく床にへたり込んだまま、為男は身動きひとつできなかった。

冷子が、死ぬ。

落子が、裏切る。

それは強制イベントで、絶対に逆らうことはできないのだ。

落子の『台本』を床に戻し、逃げるように部屋に閉じこもった為男は、耳をふさぎ、目をつむって、眠れないままに朝を迎えた。

ふと、早朝だというのに人の気配がする。

為男が細く開けたドアの隙間から様子を窺うと、そこには制服を着た落子の姿が見えた。たしか今日のご飯当番は落子だが、こんなに早起きする必要は無い。

いそいそと家を出た落子を、何かにとり憑かれたようにして為男は後を追いかけた。

そんな二人の前に、そろそろ見慣れ始めた学校の校舎が見えてくる。

まだ六時過ぎだというのに校門は開いていて、落子の姿は校舎裏へと消えた。

校舎の裏手は、新校舎と旧校舎に挟まれて細い路地となっている。常に人気は無いし、周りからは死角となっていて、何かをしても露見しにくい場所ではある。

様子を窺おう、と校舎の角から顔を出した為男は、慌てて首を引っ込めた。

そこには女と男、二人の人影があったのだ。

一人は落子。もう一人、その隣に居るのは背の高い男子生徒。

――あのきざったらしい仕種には、見覚えがある！

為男の頭に、かっとな血が上った。そこに居たのは、屋上で為男を襲撃してきた三人組の一人。たしか、『魔法使い』智則とか名乗っていたはずだ。

落子と智則、その奇妙な組み合わせに為男が困惑した瞬間、智則が当たり前のように手を伸ばして落子を抱き寄せた。そして落子も、智則の背中に手を回す。

愛しげに、抱き合う男と女。

落子の背中をさすっていた智則の右手が、蛇のようにゆっくりと下に降りていき、スカート越しに大きなお尻を容赦なく撫で回す。そんなことをされていても、落子が抵抗する様子は無い。むしろ、智則に体をこすり付けるようにしている。

時間が止まったように動くものの無い世界で、しばらく智則の右手だけが動いていたが、我慢できなくなったのか、寄り添う二人の姿は旧校舎の中へと消えていった。

——これが、裏切りの真の理由なのか……。

為男は、死人のような顔で力なく大地に両膝を突き、両手で顔を覆った。

何かの演技かもしれないじゃないか、と為男はひらひら笑った。

何かの間違いかもしれないじゃないか、と為男はぎりぎりとかめかみを震わせた。

読んでしまった『台本』は本物ではなく、偽物なのかもしれないじゃないか、と為男はどうとう泣いた。

それでも、ゾンビのような顔色と足取りで為男は家に戻った。

万が一にも落子が登校前にもう一度家に戻ってくるとまずいことになる、と思えたし、何よりも為男には確かめなくてはいけないことがあったのだ。

その日の昼休み、為男はまっすぐに一年生のクラスに向かうと、冷子を呼び出した。

「今、ちょっといいか？」と、ぎこちなく笑った主人に、「何？」と、下僕は露骨に怪訝そうな顔を向けた。

そんな冷子の態度にひるみながらも、為男は懸命に口を動かした。「勇者三人組って、どんな奴らなんだ？」

「……どうして、急に興味を持つようになったのかしら？」

「まあ、あれだ。その、ドジ子が『僧侶』の子に看病してもらったって話を聞いたから」

「知ってどうするの？ わたしたち、お互いを殺しあうのよ？ 知ればそれだけ、つらくなるだけよ？」

「それは……そうだけど。そ、その、命令だぞお！」

「ふうん、こんな時だけ、ね。まあいいわ」

胸を揺らしてウェーブのかかった茶髪をかき上げると、冷子は順番に解説を始めた。

「『僧侶』のフルネームは佐治美優さん。一年生ね。まあ、清楚なところだけが売りかしら。可愛い顔しているけど着やせするタイプで、脱ぐと結構凄いらしいわ」

「『勇者』のフルネームは剣持勇太さん。二年生だからあたしにとっては剣持先輩ね。奇襲をかけてきたからたぶん知っていると思うけど、まっすぐに単純な性格よ」

「最後、『魔法使い』のフルネームは伝法智則さん。この人は三年生で、ご主人さまにとっても先輩に当たるわ」

悄然として話を聞くだけだった為男が、ここで初めて顔を上げて冷子の目を見た。

「その、伝法……先輩の、情報は他に無いのか？」

「どうして伝法先輩にこだわるのかしら？ あたしはてっきり、佐治さんの話を詳しく聞きたいのか、と思ってたけど」

と、冷子は大袈裟に肩をすくめると、不意に狐のように目を細めた。

「ご主人さま、まさかと思うけど、何か企んでるの？ そう言えば珍しく、朝もわたしより早く起きていたわよね」

女の勘は怖い。為男の背中が凍りついた。

——もしかして、ぼくがドジ子の『台本』を読んだことを見抜いたのだろうか？

為男は軽く頭を振ると、それは違うな、と自分の冷えた心を見つめた。

思い出すのも嫌なことだが、あの『台本』を見る限り、冷子は落子の造反よりも先に倒されている。ということは、冷子の『台本』には冷子のことしか書いていないはずだから、自分が倒された後のことは書いていない、のではないだろうか。

それに、冷子がまさか落子の『台本』を読むとも思えない。

——冷子はことの真相に気づいていないに違いない。

と、為男は奇妙なまでに的確な判断を下した。

「いや、なんていうか、屋上で奇襲された時、あの背の高い『魔法使い』が仕切っているように見えたからさ。もしかして、その伝法先輩がリーダーなのかな、と思って……」

冷子は、為男の言葉の中にある胡散臭いものを察知したようで、胸を抱えて腕組みをしたまま主人の目をにらみつけていた。そんな冷子に、

「伝法先輩のこと、詳しく説明しろ。命令だぞお」と、為男が掠れた声を出した。

冷子は目つきはそのまま、口だけをゆっくりと動かした。

「伝法先輩は、見ての通りの美形。おまけに『魔法使い』なのに運動神経抜群でスポーツ万能、頭脳明晰で学業優秀、そして両親は資産家。いわゆる完璧超人、ってやつかしら」

「……そう、か」

為男の顔立ちは普通。運動も勉強も並。そして財布の中身も寂しい限り。

——これじゃあ、ドジ子がああ『魔法使い』に惹かれるのも仕方ない、のかな。

と、薄笑いを浮かべた為男の顔を見て、冷子は妙な方向に誤解を

したようである。

「ねえ、まさかと思うけど。伝法先輩に、その、興味があるんじゃないわよね」

「……どういう意味？」

「その、女は駄目で、男なら、っていうわけじゃないわよね？」

為男のへらへらした笑顔に、流石に苦いものが混ざった。

「おいおい、まさかそれはないよ。勘弁してくれ」と、ため息をついた為男に、

「じゃあ、何でわたしに手を出さないのよ」と、冷子は真剣な顔で申し立てた。

「ちよっと、他の生徒がいるだろ？」と、為男は慌てたが、

「どうせ、あたしたちの話なんて聞いてないわ」

と、強く吐き捨てると、冷子は為男の目の前に大きく胸を突き出してみせた。

「あなたはこの胸やお尻はもちろん、あたしの全てを好きなようにする権利があるのよ？ どうせ結末は変わらないわ。自分の好きなようにやったらいいじゃないっ」

話が変な方向にずれていつているな、と為男は再び力無く笑った。

「そんなこと、言われても、その、困るよ……」

「据え膳食わぬは男の恥、じゃないの？」

「自分で据え膳、って言うなよ」と、為男は呆れて冷子をにらんだが、

「ふざけないでよ。女の子に恥かかせるのが楽しいの？」と、冷子はにらみ返してきた。

「……何でそんなに積極的なんだよ」

「あたしだって、女なのよ？ 女として生まれた以上、何も知らずに死ぬのは、嫌っ」

一歩下がった為男に、冷子は二歩踏み込んできた。

「それに運よく外見のいい役も貰えたのよ。雑魚キャラじゃなくて、ちゃんと名前も台詞もある役を与えられる……これ、凄い幸運なこ

となのよ、わかる？」冷子は両手を広げると、声に力を籠めた。「あたしはね、あなたみたいに選べる立場じゃないのよ？ 相手をしてもらおうとしたら、あなたしかいないんだから」

為男の反応が薄いのをみると、冷子は作戦を変えて挑発に出た。

「それとも、実は貧乳フェチなのかしら？ そういえば、朝はドジ子もいなかったわよね。もしかして、二人でイイコトしてたの？」

まだできたばかりの傷口を掻き毟られて、為男が反射的に言い返した。

「そんなわけないだろ！ ドジ子は、そんなことに興味が無いっ」

「あらあら、女はしたたかなのよ？ そう見えるのは『台本』通りに演技しているだけ。ドジ子もあれで、裏で何をやっているか知れたものじゃないわ」

冷子は傷口に更に塩をなすり込むと、とどめとばかりに声を張り上げた。

「あたしだってえ、魅力一杯の伝法先輩の下僕の方があ、よかったわぁ」

冗談めいた台詞。

それがどれほど為男を傷つけたのか、冷子には想像もつかなかった。

——ドジ子だって、伝法先輩の方がいい、に決まってるんだ。

蒼白な顔で押し黙った為男を置いて、冷子はい、と踵を返した。最後の氣力を振り絞って為男が呼び止める。

「待てよ冷子、最後に……最後にひとつだけ」

「何よ、しつこいわね」

「冷子は、特訓するとレベルが上がる、のか？」

「何いってるの、莫迦みたい。そんな都合のいい話、あるわけ無いじゃない！」

——これで、確定だ。

と、為男は全てを認めた。冷子は主人たる為男に対して、嘘はつけないのだから。

特訓によって落子のレベルは上がるが、冷子のレベルは上がらない。

つまり、それは落子が『勇者』サイドのキャラクターである、という証明なのだ。

落子はストーリー上、回復魔法を使う美優の代役として『勇者』と行動を共にすることになっている。だから、『勇者』たち三人組と同じように、人殺しをしなくても特訓によってレベル上げをすることができるといふ『特殊能力』を持っているのだ。

為男は、落子に特訓を命じた時のことを思い出した。

『ドジ子は、特訓でレベルは上がるの？』

『で、できますですけど……』

喜怒哀楽のはっきりしている落子にしては、珍しく複雑な表情をしていた。きっとその『特殊能力』を明かすことで、造反予定がばれるのではないかと心配していたのだ。

それに、『僧侶』美優に対する落子の態度も納得できるものがある。冷子の言う通り、

『わたしたち、殺しあうのよ？ 知ればそれだけ、つらくなるだけよ？』

というのが、本来あるべき感情のはずなのだ。

敵キャラの美優に冷たく当たっていた冷子の行動は、実はごく自然なものだったのだ。

落子が自分から進んで美優と仲良くできるのも、明るい未来が待っていたからなのだ。

持っていた『台本』の厚さの違いのこと。

特訓によるレベル上昇という『特殊能力』のこと。

敵であるキャラとの交友関係にかかわること。

落子はドジって何度も情報漏れを起こしていたのに、鈍い為男は気が付かなかった。

——間拔けな悪役は、無様な最期を遂げるだけだ。

と、為男はついに何もかもを放り投げた。どうせ何をやっても『台本』通り。敷かれたレールの上を進むだけで、結局のところ、為男には自由も未来も無かったのだ。

「はい、何でしょうか先生」

「……四百三十七です」

「大丈夫。何でもないよ、『岸川』さん」

「ああ、うん。ぼくは帰宅部だからね」

「いいよ。『川口』みたいに運動神経よくないから」

「さよなら」

規定通りの会話をこなして家に帰ると、夕飯の仕度をしている落子を見無視して、為男は二階へと上がった。ノックも無しに、冷子の部屋にずかずかと入り込む。

「ちよつとご主人さま、何なの？　これから外に行くところだったんだけど」

「脱げよ」

冷子の胸だけを見て、為男は言った。

「……へえ。やつとその気になったんだ。う、嬉しいわね」と、ぎこちなく笑った冷子に、

「いいから、さっさと脱げよ」と、為男は下目使いで命令した。

「そういう、態度なんだ……」と、顔を引きつらせた冷子に、

「殴られないと、分からないのか？」と、為男は露骨に不快感をあらわにした。

「か、かしこまりました。ご、ご主人さま」と、青い顔でがくがくと震えだした冷子は、機械的に制服を脱いでいく。

下着だけを身に付けた色部冷子の姿は、想像を超える見事なもの

だった。上から下まで容赦ない視線を浴びせた為男は、満足そうに大きく頷いた。

——ぼくはどうせ無様に死ぬんだ。やりたいようにやってやる。

為男は、冷子の肉付きのいい白い両肩に無造作に手を伸ばし、そしてそこで、

動けなくなった。

血がにじむほど唇を強くかみ締めた冷子の目に、満々と涙がたたえられていたからだ。

為男の中で、ぎざぎざした部分と、ぬるぬるした部分とがせめぎあう。気持ち悪いほど静か過ぎる時間が流れた後で、為男はどうとう手を引っ込めた。

「……ごめん。わ、悪かったよ」

冷子は頬を流れる涙もぬぐわずに、うつむいていた顔をゆっくりと上げた。

「『台本』上のご主人さまといっても、これくらいはいいいわよね」

冷子の右腕が振り上げられ、為男の頬に音高く平手打ちが振り下ろされる。

「この、ひとでなしっ」

「……すまなかった」

「最っ低。あんたなんかね、男のクズよ！」

その一言を残し、制服を着なおした冷子は階段を駆け降りていった。

両手で顔を覆い、懸命に嗚咽をこらえながら。

為男は誰も居なくなった冷子の部屋にしばしたずんでいたが、視線を動かして冷子の部屋を見渡すと、半ば呆然として階下に降りていった。

第六章 わがままを少しだけ――（ 2 ）

「あ、あの、ご主人。冷ちゃん、お出かけしてしまったです」

あたふたとエプロン姿の落子が台所から顔をのぞかせたが、為男の視線を浴びると顔におびえを浮かべて半歩引いた。それでも無理に表情を作ってにへへ、と笑うと、

「今日は、シンプルに卵焼きと鳥のから揚げにしてみましたです」

と、大皿に盛った夕食のおかずを示した。為男はそれを見もしないで、

「いない」

と、吐き捨てた。落子が震える唇でさあさあ、どうぞどうぞ、と繰り返したのを見て、

「いない、って、言ってるだろ！」

と、為男は強く腕を振り上げた。

できたてのおかずが宙を舞い、鈍い音と共に床にばら撒かれる。為男はしまった、と思ったが、空の皿を抱えたままの落子は笑ってみせた。

「ごめんなさいです」

と、ぺこりと一礼すると、笑顔のままで続けた。

「まずいものを無理矢理食べさせようとして、ごめんなさいです」

落子はぺこぺこ頭を下げると、床に散らばった唐揚げと卵焼きを拾い集め始めた。

「ごめんなさいです、ごめん……うっ……なさい……うっ……です」
ぼろぼろと泣きながら拾い続けている下僕の姿を見て、主人は頭を抱えた。

――ぼく、何やってるんだらう。悪いのは『台本』で、ドジ子じゃないのに。

急に為男は決然として立ち上がると、棚にあったウェットティッシュを奪い取るようにして手にとり、ひよい、と床の卵焼きを拾い上げ、丁寧に拭いてから口に放り込んだ。

為男の一連の行動を呆然と見ていた落子は、素っ頓狂な声を上げた。

「あ！ 何やってるんですかあー？ 汚いから駄目ですす！」
ゆっくりと咀嚼しながら、為男は力強く断じた。

「三秒ルールだ」

「……ふ、ふえ？」

目を点にしている落子に構わず卵焼きを飲み込んだ為男は、
「見た目はともかく、結構おいしいな」と、大きく頷いた。

「あの、無理してお世辞いらないです」と、赤い目をした落子が俯いたが、

「いや、最初のベーコンエッグに比べたら、すごく上手になってるよ」

と、為男は笑って、落子の頭をぼむぼむ、と撫でた。

「床、結構きれいだから、たぶん大丈夫だよ。拾って食べよう」

「でも、ご主人にそんなもの食べさせられないです。作り直しますです」

「気になるんなら、床に触れた部分だけ包丁で削げばいいじゃないか。結構おなかすいているんだ。手早くやってしまおう」

為男が包丁を手にしたので、落子が慌てて自分がやりますです、
と言いながら包丁を恭しく受け取った。

為男と落子の二人で、おかずを拾ってはウェットティッシュで拭いたり、或いは包丁で汚い部分を削ぎ落としていたり。十分ほどで、作業は終わった。

「これだけ無事でしたです」と、皿に盛り直したおかずを見た落子が「ちょうど二人分くらいにはなるかと思えますです」と、呟いた。
為男が軽く眉をひそめたのを見て、

「さつき、冷ちゃんは朝まで帰らない、って言っていましたけど……」

と、恐る恐る主人の顔を上目遣いで探った落子に、為男は迷いも見せずに命じた。

「いや、三等分しよう。とっておいてラップでもかけておけ」

「えへへ、ご主人優しいです」

と、落子はにぱぱ、と笑った。

——何言っているんだ、優しいのはドジ子の方だよ。

と、為男は苦笑した。台所は玄関の近くにあるから、冷子が泣きながら家を飛び出していったのも落子は見えていたはずなのに、そんなことをおくびにも出そうとしないのだ。

為男はちよつと考えてから、

「たしか電子レンジ、あったよな」と、訊いた。

「はいです。テレビは無いのに、電子レンジはありますですね」と、落子が小首を捻る。

「変な家だなあ」

二人で顔を見合わせて、にへへ、と笑った為男は、今度はバケツと雑巾の所在を訊いた。

「あの、床の掃除はわたしがしますです」と、眉をへの字にした落子に、

「いや、ぼくがする」と、為男は優しいが強い声で断じた。

「それはまずいです。下僕失格です。ご主人おなかすいてるですから、先にさあさあ、どうぞどうぞ、です」と、ちよつと泣きそうな落子を見て、

「じゃ、ふたりで掃除をしよう」と、為男は妥協した。

「でも、です……」と、落子がしつこく食い下がるのを見て、

「命令だぞ」と、為男は軽やかに笑って言った。

台所の床がタイルに似た樹脂素材だったのは幸運で、絞った雑巾でふきふきするだけで掃除は何とかかなりそうだった。絨毯みたいな

ものだったら大変だったな、と安心しつつ、為男がバケツにひよいと伸ばした手が、落子のそれと重なった。

「あ、ごめんなさいです」

慌てて引っ込められた落子の手を、為男は殆ど反射的に握ってしまふ。

——あったかい、手だな。

と、為男は思った。小さいくせに、まるで持ち主の心を映し出すかのように、その手は優しいぬくもりをたたえている。為男は、掴んだ落子の手をぎゅうつ、と握り締めた。

「あの、ご主人？」

自分と呼ぶ声に導かれるようにして、為男は落子の手を引くと、その小さな体を引き寄せた。両腕をそつと背中に回すと、今度はぬくもりが為男の胸の中に広がった。

優しくて、柔らかくて、自分を包み込むようなぬくもり。

だが、このぬくもりは、所詮は他人のものなのだ。

為男は『台本』上の主人、それだけのこと。

実際には『台本』上も『台本』以外ですらも、為男のものではない。

すべては、あの伝法智則とかいう三年生のものなのだ。

こんなことをしても、落子は嫌がるだけなのは分かってる。でも、

「お前、あったかいからさ。ちよつとだけ……」

為男の目に、涙がにじんだ。

「……ちよつとだけ、ぼくのわがままを許してくれ」

為男は落子の背中に回した手に、少しだけ力を籠めた。

落子が、ぽつり、と言った。

「ご主人、怖いですか？」

「うん」

間髪おかずに頷いてしまってから、為男は自分で自分に驚いた。

——そうか、ぼくは怖いんだ。死ぬのが怖いんだ。

そんな当たり前のことにすら自分は気が付いていなかった、と為男は目を見張った。

「大丈夫です。わたしがついてますです」

にへへ、と笑った落子を見て、

——こんなときまで、下僕として一生懸命振舞わなくてもいいじゃないか。

と、為男は申しわけ無い気持ちでいっぱいになった。

いくら為男だって、落子の言葉をそのまま額面通り受け取るほど、莫迦ではない。

本気ではない証拠に、落子は為男の背中に手を回そうとはしなかった。両手を主人の胸に当て、しがみつくようにしている。

「ドジ子、優しいな」

為男は左手を背中に回したまま、右手でぽむぽむ、と下僕の頭を撫でると、

「お前がいてくれて、本当に良かったよ」と、微笑を浮かべた。

「あ、あのう……そのう……」

「うん？ どうした？」

落子は真っ赤な顔で、胸の中から為男の顔を見上げた。

「もしかして、わたし自身を、ご、ご所望ですか？」と、目をうるうるさせた落子に、

「まさか！ そんなことはしないよ」と、為男は爽やかに答えた。

「……ですよね。わたし、冷ちゃんみたいに魅力ないですから」

半分安心、半分がっかり、そんな感じで落子はにへへ、と笑った。

為男は外見は笑顔のまま、内心で渋面を浮かべた。

——ドジ子は『台本』通りに役をこなそうと精一杯で、かなり無理をしている。

どこでもどんなときも、一生懸命な落子。

この落子の気持ちに、応えてあげなければいけない、と、為男は強く決心した。

二度と、落子の泣き顔は見たくない。いや、落子を泣かせてはい

けない。

せつせとお茶碗にご飯をよそっている落子を見ながら、為男はあ
ることを思い出した。

他人の『台本』を呼んでしまうとその者にドでかい大不幸が訪れ
る、との話だったが、落子の『台本』を呼んだことで為男に訪れた
ドでかい大不幸、それはこのことだったのかもしれない、と為男は
考えたのだ。

落子の『台本』を呼んだことで、為男は落子が裏切ることを知っ
てしまった。その結果、落子に対してではなく、冷子にもひど
いことをしてしまい、為男は嫌というほど自分の愚かさと惨めさを
悟ることになったのだ。

それに何より、未来を知らなければ、落子と過ごす時間は安らぎ
に満ちたものになっていたに違いないのだ。

冷子が居ない間の、二人きりの甘くて幸せなひととき……。

——いや、それは違う！

と、慌てて為男は頭を振った。そんなものは本当の幸せではない
し、今、為男に訪れているのも本当のドでかい大不幸ではない。

為男にとって一番恐ろしい想像は、別のものだった。

——もし、『台本』を呼んでいなかったら。ドジ子の本当の気持
ちを知らなかったら。

調子に乗った為男は、落子が自分に惚れていると勘違いして、抵
抗しないのをいいことにうっかり手を出してしまったかもしれない
のだ。

落子は『台本』上、主人たる為男に逆らうことはできないから、
きつと喜んでいるように一生懸命演技をして、ベッドの上でその全
てを為男に捧げざるを得なかっただろう。

そして、自室で独り真の恋人に謝りながら、こっそりしくしく泣
くに違いない。

そんなことをして落子を傷つけるくらいだったら、こんな不幸は
へでもない、と為男は思った。

——お前の幸せな未来だけは、守ってやるから。それがせめてもの恩返しだ。

「ご主人？」

考え込んでいた為男を見て、ちょこん、と小首をかしげた落子の頭を、為男はもう一度ぽむぽむ、と撫でた。

その翌朝、為男のクラスに五人の転校生が入った。
サ行の生徒がまとめてやられたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2001y/>

導師オッショーの台本

2011年12月16日02時45分発行